

彼ノ宗遺跡

～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～



1985年3月

善通寺市教育委員会

か む ね

彼ノ宗遺跡

～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～



1985年3月

善通寺市教育委員会

序

玉藻よし、さぬきの国とうたわれた、この地には、いたるところに古代のロマンが眠っています。大麻の山を背い瀬戸の内海にのぞむわがふるさとの心の発祥の場ともいえる彼ノ宗遺跡もその一つです。

私たちは弥生の人々の眠りを覚ますまいと念じながら昭和59年の春から秋にかけて、静かに扉を開けてみました。いま、歴史の深淵を秘めた数々の資料の整理を進めていますが、これまでの調査の概要をまとめ、多くの方々の活用に供するに当たり、調査にご協力いただいた方に心から感謝申し上げこれからもなお一層の御支援御協力を賜りますようお願い申し上げる次第です。

普通寺市教育長 佐 柳 正



検出された竪穴住居・土坑・柱穴・小児壺棺墓などの
遺構群（発掘区南端）を北から撮影。



竪穴住居から出土した懸垂鏡（弥生小形彷製鏡片）
及び硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉。

例　　言

1. 本書は弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2. 本遺跡は、香川県善通寺市仙遊町二丁目680番地の262・271、5番地の8・10・11・12に所在し、この地区的旧字名をもって彼ノ宗遺跡とする。
3. 調査は昭和59年4月1日から昭和60年3月31日の期間で、善通寺市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は、香川県土木部河川課より委託をうけ、善通寺市教育委員会社会教育課・文化振興室が実施した。組織は次のとおりである。

総括教育長	佐柳正	調査総括主幹	齋庭健
室長	飛田和幸	調査担当嘱託	笹川龍一
庶務主任主事	高木芳子	庶務	大平友子
		"	川崎友子

発掘調査に際しては、香川県教育委員会文化行政課主幹・松本豊胤、主任技師・東原輝明の指導を得た。

5. 本書の執筆編集は調査担当者である笹川龍一が行ない、遺物の実測・トレース・復原については四国学院大学及び奈良大学生の補助を得た。
6. 調査期間中あるいは整理にあたっては下記の機関、方々より御協力、御教示をうけた。記して謝意を表したい。
香川県教育委員会文化行政課、香川県瀬戸内海歴史民俗資料館、田辺昭三、丹羽祐一、古市光信、水野正好、六車恵一、矢原高幸（敬称略）。
7. 遺構については、ST（竪穴住居）・SK（土坑）・SB（掘立柱建物）・SP（柱穴）・SD（溝）・SX（小児壺棺墓）で表示し、実測図に示した方位はすべて磁北をさす。

目 次

グラビア・序・例言・目次	
第一章 遺跡周辺の地理と歴史	1
第二章 調査に至る過程	5
第三章 調査の概要	7
1. 弥生時代の遺構と遺物 ①竪穴住居跡	12
②土坑	100
③小兒壺棺墓・小兒土坑墓	107
2. 小結	138
3. 古墳時代の遺構と遺物 挖立柱建物跡と溝	142
4. 獣骨・炭化物分析表	154
第四章 まとめ	156
図版	157

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺遠景	1	第20図 ST-03平・断面図	17
第2図 調査地と周辺遺跡	3	第21図 ST-03(西から)	18
第3図 昭和37年発見の小兒棺	5	第22図 ST-03・鹿角の出土状況	18
第4図 彼ノ宗遺跡発掘調査区全図	6	第23図 ST-03出土遺物実測図	19
第5図 発掘前の調査区風景	7	第24図 ST-04平・断面図	20
第6図 グリッド・トレンチ配置図	8+9	第25図 ST-04・滑石製模造品実測図	21
第7図 第1トレンチ平・断面図	8	第26図 ST-04(西から)	21
第8図 第5トレンチ平・断面図	9	第27図 ST-04出土遺物実測図	22
第9図 第1トレンチ検出状況	10	第28図 ST-05平・断面図	23
第10図 SX-01壺棺出土状況	10	第29図 ST-05(北西から)	23
第11図 発掘作業風景	11	第30図 ST-06平・断面図	24
第12図 検出された遺構群	11	第31図 ST-06出土遺物実測図	25
第13図 ST-01平・断面図	12	第32図 ST-07平・断面図	25
第14図 ST-01(北から)	13	第33図 ST-08平・断面図	26
第15図 ST-01(西から)	13	第34図 ST-08出土遺物実測図	27
第16図 ST-01出土遺物実測図	14	第35図 ST-08・遺物出土状況	27
第17図 ST-02平・断面図	15	第36図 ST-09平・断面図	28
第18図 ST-02(北から)	16	第37図 ST-09(北から)	29
第19図 ST-02(西から)	16	第38図 ST-09・土製丸玉・銅鏡実測図	30

第39図	S T - 09・銅鏡片の出土状況	30
第40図	S T - 09出土遺物実測図	31
第41図	S T - 09(東から)	32
第42図	S T - 09・遺物出土状況	32
第43図	S T - 09・遺物出土状況	32
第44図	S T - 09・遺物出土状況	33
第45図	S T - 10平・断面図	33
第46図	S T - 11平・断面図	34
第47図	S T - 12平・断面図	35
第48図	S T - 12(西から)	36
第49図	S T - 12出土遺物実測図	37
第50図	S T - 12出土遺物実測図	38
第51図	S T - 12出土遺物実測図	39
第52図	S T - 12・遺物出土状況	40
第53図	S T - 12・甕の出土状況	40
第54図	S T - 2・甕の出土状況	40
第55図	S T - 13平・断面図	41
第56図	S T - 13出土遺物実測図	42
第57図	S T - 13(北西から)	42
第58図	S T - 14平・断面図	43
第59図	S T - 15平・断面図	44
第60図	S T - 14・15・16(北から)	45
第61図	S T - 15出土遺物実測図	46
第62図	S T - 15(北から)	47
第63図	S T - 15・遺物出土状況	47
第64図	S T - 15・遺物出土状況	47
第65図	S T - 16平・断面図	48
第66図	S T - 16(北から)	49
第67図	S T - 16出土遺物実測図	50
第68図	S T - 16・遺物出土状況	50
第69図	S T - 16・遺物出土状況	50
第70図	S T - 17平・断面図	51
第71図	S T - 17・遺物出土状況	51
第72図	S T - 17出土遺物実測図	51
第73図	S T - 18平・断面図	52
第74図	S T - 18とS T - 17(北西から)	53
第75図	S T - 18・完掘状況(北西から)	53
第76図	S T - 18出土遺物実測図	54
第77図	S T - 18・S P - 01検出状況	54
第78図	S T - 18・S P - 02検出状況	55
第79図	S T - 18・S P - 03検出状況	55
第80図	S T - 18・S P - 04検出状況	55
第81図	S T - 18・S P - 01~06断面	56
第82図	S T - 19平・断面図	57
第83図	S T - 19出土遺物実測図	58
第84図	S T - 19(東から)	58
第85図	S T - 20平・断面図	59
第86図	S T - 20(西から)	60
第87図	S T - 20のベッド状遺構	60
第88図	S T - 20出土遺物実測図	61
第89図	S T - 20・埋土中の甕と遺物	62
第90図	S T - 20・遺物出土状況	62
第91図	S T - 20・炭化物の出土状況	62
第92図	S T - 21平・断面図	63
第93図	S T - 21(北から)	64
第94図	S T - 21出土遺物実測図	65
第95図	S T - 21・鉢の出土状況	66
第96図	S T - 21・砥石の出土状況	66
第97図	S T - 21・石皿の出土状況	66
第98図	S T - 22平・断面図	67
第99図	S T - 22出土遺物実測図	67
第100図	S T - 23平・断面図	68
第101図	S T - 23出土遺物実測図	69
第102図	S T - 23(北から)	69
第103図	S T - 24平・断面図	70
第104図	S T - 24(北から)	71
第105図	S T - 24出土遺物実測図	72
第106図	S T - 25平・断面図	73
第107図	S T - 25出土遺物実測図	74
第108図	S T - 26平・断面図	75

第109図	S T - 26(北から).....	76
第110図	S T - 26・床面中央土坑検出状況	76
第111図	S T - 26出土遺物実測図	77
第112図	S T - 27平・断面図	78
第113図	S T - 27出土遺物実測図	79
第114図	S T - 27(東から).....	79
第115図	S T - 28・S T - 29平・断面図	80
第116図	S T - 29出土滑石製品実測図	80
第117図	S T - 30平・断面図	81
第118図	S T - 30出土遺物実測図	81
第119図	S T - 31平・断面図	82
第120図	S T - 31(北から).....	83
第121図	S T - 31・小鉢の出土状況	83
第122図	S T - 31出土遺物実測図	84
第123図	S T - 32平・断面図	85
第124図	S T - 32出土遺物実測図	86
第125図	S T - 32・S K - 01遺物出土状況	87
第126図	S T - 32・S K - 02遺物出土状況	87
第127図	S T - 32・S K - 02遺物出土状況	87
第128図	S T - 33平・断面図	88
第129図	S T - 33(東から).....	89
第130図	S T - 33(北から).....	89
第131図	S T - 33出土遺物実測図	90
第132図	S T - 34(東から).....	90
第133図	S T - 34平・断面図	91
第134図	S T - 35・S T - 36平・断面図	93
第135図	S T - 35・S T - 36出土遺物実測図	94
第136図	S T - 35・S T - 36(東から).....	94
第137図	S T - 37平・断面図	95
第138図	S T - 37(西から).....	96
第139図	S T - 37遺物出土状況	96
第140図	S T - 37出土遺物実測図	97
第141図	S T - 38平・断面図	98
第142図	S T - 38出土遺物実測図	99
第143図	S T - 38(西から).....	99
第144図	S T - 38遺物出土状況	99
第145図	S K - I 出土遺物実測図	100
第146図	S K - I 出土遺物実測図	101
第147図	S K - I 出土遺物実測図	102
第148図	S K - II 出土遺物実測図	103
第149図	S K - III 出土遺物実測図	103
第150図	S K - IV 検出状況(西から)	104
第151図	S K - V 出土遺物実測図	104
第152図	S K - VI 出土遺物実測図	105
第153図	S K - VII 遺物出土状況	105
第154図	S K - VII 出土遺物実測図	106
第155図	S X - 01平・断面図	107
第156図	S X - 01検出状況(北から)	107
第157図	S X - 01・壺棺実測図	108
第158図	S X - 02・壺棺実測図	109
第159図	S X - 03平・断面図	110
第160図	S X - 03検出状況(東から)	110
第161図	S X - 03・壺棺実測図	111
第162図	S X - 04平・断面図	112
第163図	S X - 04検出状況(西から)	112
第164図	S X - 04・壺棺実測図	113
第165図	S X - 05平・断面図	114
第166図	S X - 05検出状況(北西から)	114
第167図	S X - 05・壺棺実測図	115
第168図	S X - 06平・断面図	116
第169図	S X - 06検出状況(北から)	116
第170図	S X - 06・壺棺実測図	117
第171図	S X - 07平・断面図	118
第172図	S X - 07検出状況(北から)	118
第173図	S X - 07・壺棺実測図	119
第174図	S X - 08平・断面図	120
第175図	S X - 08検出状況(北から)	120
第176図	S X - 08・壺棺実測図	121
第177図	S X - 09平・断面図	122
第178図	S X - 09検出状況(北から)	122

第179図	S X - 09・壺棺実測図	123
第180図	S X - 10平・断面図	124
第181図	S X - 10検出状況(南西から)	124
第182図	S X - 10・壺棺実測図	125
第183図	S X - 11平・断面図	126
第184図	S X - 11検出状況(南東から)	126
第185図	S X - 11・壺棺実測図	127
第186図	S X - 12検出状況(南西から)	127
第187図	S X - 12平・断面図	128
第188図	S X - 12・壺棺実測図	128
第189図	S X - 13平・断面図	129
第190図	S X - 13検出状況(南から)	129
第191図	S X - 13・壺棺実測図	130
第192図	S X - 14平・断面図	131
第193図	S X - 14検出状況(西から)	131
第194図	S X - 14・壺棺実測図	132
第195図	S X - 15平・断面図	133
第196図	S X - 15検出状況(東から)	133
第197図	S X - 15・壺棺(蓋)実測図	134
第198図	S X - 16検出状況(北から)	134
第199図	S X - 16平・断面図	135
第200図	S X - 16出土遺物実測図	135
第201図	S X - 09墓坑内遺物出土状況と出土 遺物実測図	136
第202図	小兒壺棺墓・土坑墓出土上の歯	136
第203図	小兒壺棺墓検出状況	137
第204図	小兒壺棺墓検出状況	137
第205図	小兒壺棺墓検出状況	137
第206図	時代別遺構配置図	139
第207図	小兒壺棺の形態分類	140
第208図	小兒壺棺墓・土坑墓位置図	140
第209図	彼ノ宗道跡出土佐佐土器編年式案表	141
第210図	S B - 01・S K - V平・断面図	142
第211図	S B - 01(北から)	143
第212図	S K - VIIと S D - 01(北から)	143
第213図	S D - 02(北から)	144
第214図	S D - 02遺物出土状況	144
第215図	S B - 02(北から)	145
第216図	S B - 02平・断面図	146
第217図	S D - 01出土遺物実測図	147
第218図	S D - 02出土遺物実測図	147
第219図	S D - 02出土遺物実測図	148
第220図	S D - 02出土遺物実測図	149
第221図	S D - 02出土遺物実測図	150
第222図	S D - 01・05・06(北から)	151
第223図	S D - 05検出状況	151
第224図	S D - 05検出状況(西から)	152
第225図	S D - 05埋土除去後(西から)	152
第226図	S D - 06須恵器大甕出土状況	152
第227図	S D - 06出土須恵器大甕実測図	153
第228図	S D - 06出土磨製石製品実測図	153

図 版 目 次

第229図	遺構群検出状況(3 ラインから北)	158
第230図	遺構群検出状況(5 ラインから北東)	158
第231図	遺構群検出状況(5 ラインから北西)	159
第232図	遺構群検出状況(7 ラインから北東)	159
第233図	遺構群検出状況(7 ラインから北)	160
第234図	遺構群検出状況(7 ラインから北西)	160
第235図	遺構群検出状況(9 ラインから北)	161
第236図	遺構群検出状況(11 ラインから北)	161
第237図	縄文土器	162
第238図	分銅形土製品	162
第239図	銅 鐵	162
第240図	縄文土器実測図	163
第241図	分銅形土製品実測図	163
第242図	銅鐵実測図	163

第243図 磨製石器	164	第254図 弥生時代終末期の土器	171
第244図 玉類実測図	164	第255図 弥生時代終末期の土器	172
第245図 石製模造品	165	第256図 弥生時代終末期の土器	173
第246図 土製模造品	15	第257図 弥生時代終末期の土器	174
第247図 有溝石櫛	165	第258図 弥生時代終末期の土器	175
第248図 砥 石	166	第259図 弥生時代終末期の土器	176
第249図 鉄器片実測図	166	第260図 小児壺棺	177
第250図 S D-02出土の牛頸骨	167	第261図 小児壺棺	178
第251図 獣骨類	167	第262図 小児壺棺	179
第252図 炭化種子	166	第263図 小児壺棺	180
第253図 弥生時代中期の土器	168	第264図 小児壺棺と小児土坑墓供献土器	181
第254図 弥生時代後期の土器	169	第265図 古墳時代の土器	182
第255図 弥生時代後期の土器	170	第266図 古墳時代の土器	183
第256図 弥生時代終末期の土器	170		

発 行 日 1985年3月31日

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、總本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、最近の五条遺跡などの発掘調査では、この下層土中に縄文時代後期頃の土器片が含まれていることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことがうかがえる。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



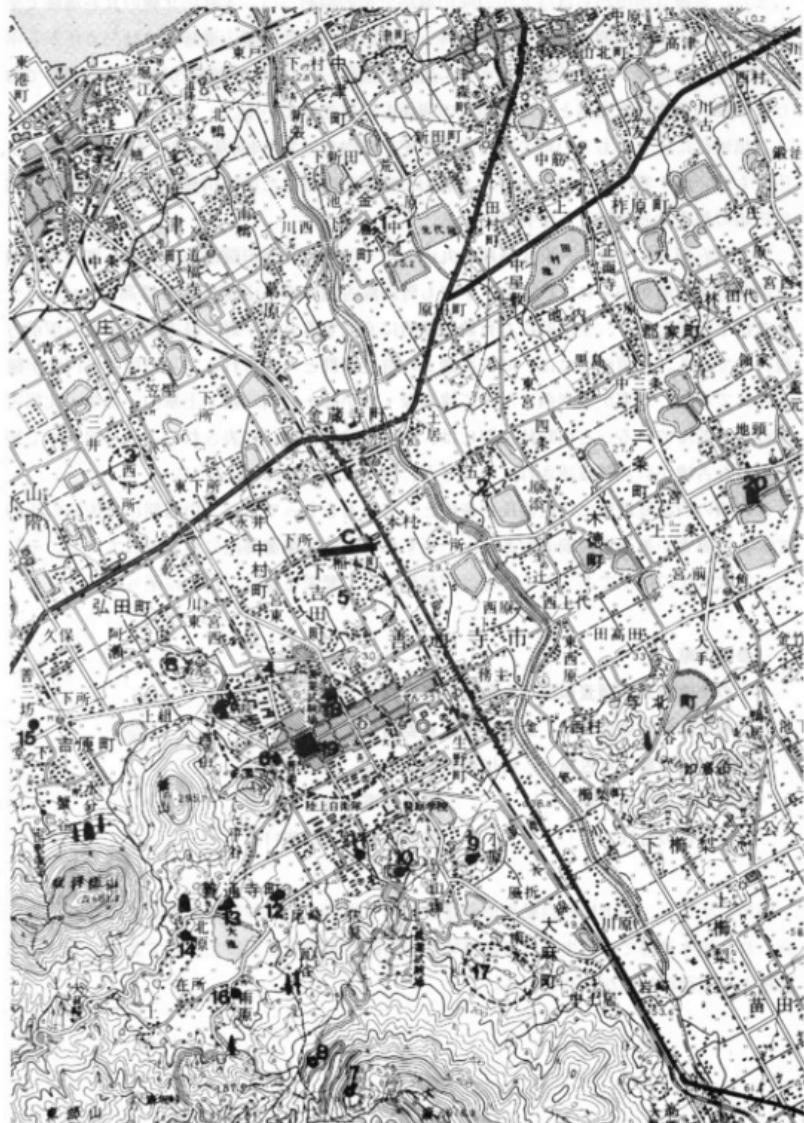
第1図 調査地周辺遠景

瀬戸内海の南岸に位置し、気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間文化の開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・普通寺市の五条遺跡・普通寺市から仲多度郡にかけて存在する三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、前期の古段階の特徴をもっている弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものが出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在もまったく不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復原海岸線が現在の標高5mコンタあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。

普通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから500m程東には石川遺跡があるが、いずれの遺跡も現在まで本格的な調査は実施されておらず、その詳細は明らかにされていない。しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての櫛棺十数点・多数の土器・石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることは明らかである。

今回の調査区はこの遺跡の西端にあたり、仮に旧字名から彼ノ宗遺跡としたが、旧練兵場遺跡・彼ノ宗地区としてとらえた方が良いであろう。また、調査区を弘田川にそって600m程上流に進むと普通寺西遺跡がある。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小形丸底壺・舟の櫓や柱材などが出土しており、生活基盤である水田城の拡大が行われたこと・古い溝の廃絶に伴った祭祀が行われたことが確認されている。これらの弥生時代の遺跡群は、二千年にも及ぶ水田耕作の発生から発達の過程を考える上で非常に重要な資料であるといえよう。

- | | | |
|-----------|------------|--------------|
| 1. 中ノ池遺跡 | 9. 磨臼山古墳 | 17. 南光古墳群 |
| 2. 五条遺跡 | 10. 鶴が峰四号墳 | 18. 伝導寺跡 |
| 3. 三井遺跡 | 11. 丸山古墳 | 19. 普通寺前寺跡 |
| 4. 旧練兵場遺跡 | 12. 王墓山古墳 | 20. 宝幢寺跡 |
| 5. 石川遺跡 | 13. 菊塚古墳 | |
| 6. 普通寺西遺跡 | 14. 北原古墳 | A. 彼ノ宗遺跡調査区 |
| 7. 野田院古墳 | 15. 青羅古墳 | B. 弥生前期遺物散布地 |
| 8. キッヂヨ塚 | 16. 宮ガ尾古墳 | C. 稲木遺跡調査区 |



第2図 調査地と周辺遺跡（1：50,000）

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍三口・大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍二口・細形銅劍五口・中細形銅鉢一口の計八口、我拝師山遺跡では計三カ所から平形銅劍五口・銅鐸一口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸一口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡を本拠とした集団との関係も注目されている。

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を越える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳の集中する地域として有名である。

まず積石塚としては、大麻山経塚・丸山一号・二号墳、野田院前方後円墳、御忌林円墳大窪前方後円墳が知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦地という、全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野の最古段階の積石塚前方後円墳である。有岡地区には、同一系譜上の首長墓群と考えられる六基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて遠藤塚・鶴が峰・北向八幡・王墓山・菊塚・北原古墳の順で並んでいる。古墳時代後期には、宮が尾絵画古墳に代表されるような線刻画で装飾された古墳が計八基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

この頃の西讃岐地域には佐伯氏が豪族として勢力をもっており、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺や善通寺の前寺があるが、いずれも旧練兵場遺跡内に建立されている。そして、古代文化の中核であったこの地は門前町として繁栄を続け、現在に至っている。

参考文献

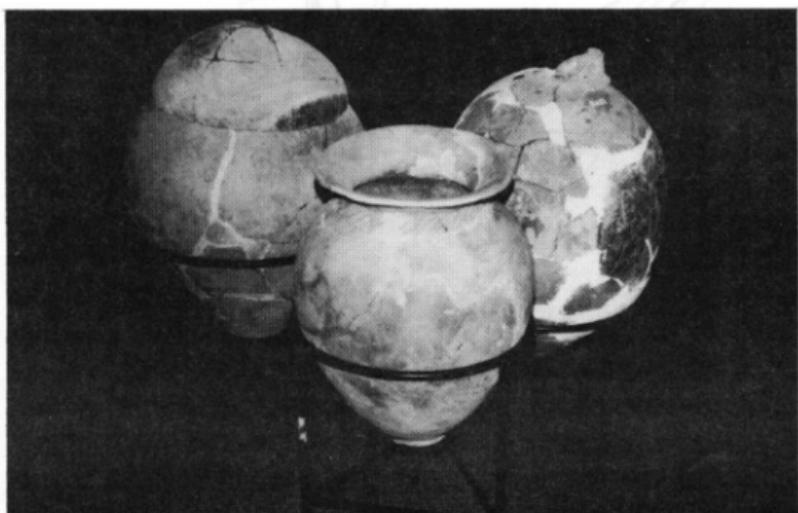
- 『中の池遺跡発掘調査概要』丸亀市教育委員会 1982年3月
- 『五条遺跡発掘調査資料』善通寺市教育委員会 1983年11月
- 『新編香川叢書・考古篇』香川県教育委員会 1983年3月
- 『善通寺市史・第一巻』 善通寺市 1977年7月
- 『善通寺市の古代文化』 善通寺市 1973年11月

昭和57年から、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が善通寺市内でも行われ、稻木遺跡では弥生時代後期末頃の集落跡や墓地などが検出されており、旧練兵場遺跡との関連の解明が期待される。

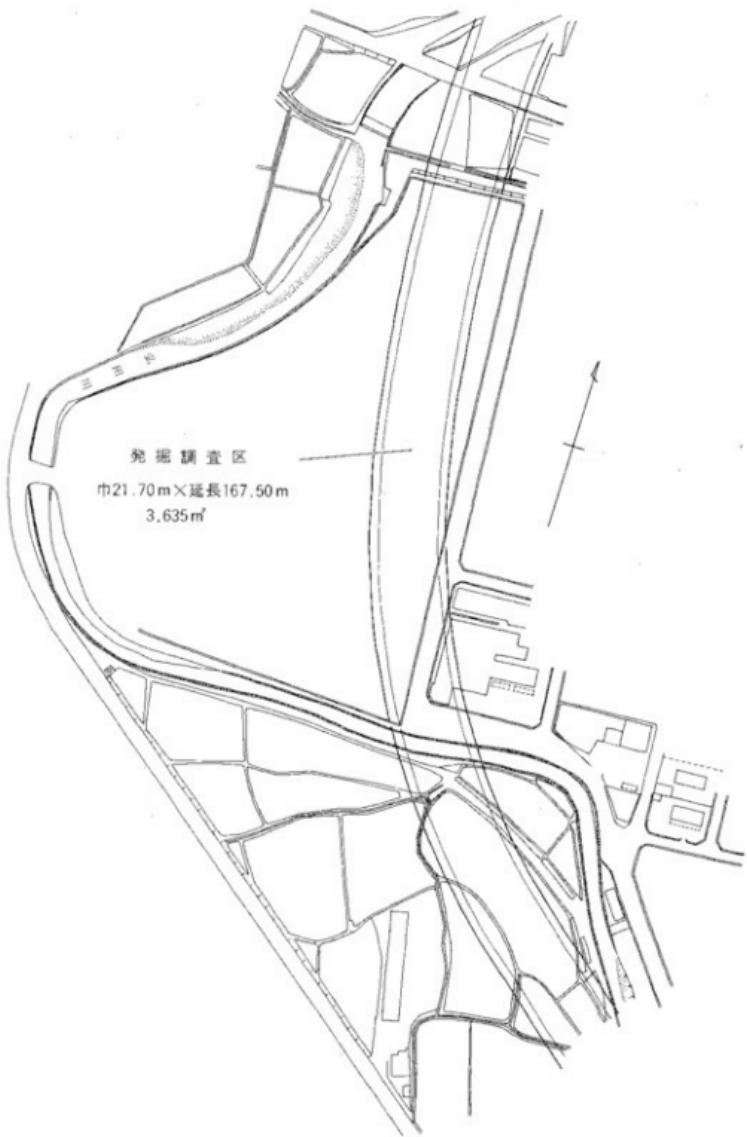
第二章 調査に至る過程

善通寺市街地の北一帯に広がる旧練兵場遺跡は、四国農業試験場や県道の整備工事などのたびに出土する豊富な遺物からみて、弥生時代前期から後期、そして古墳時代にかけての複合遺跡である可能性が強い。そして、この遺跡の成立の基盤をなすのが金倉川・弘田川であり、遺跡の東方を現在の国道319号線にそって南東から北西に流れていたとされる金倉川旧河道ぞいには、弥生時代の遺物が多くみられる。また、遺跡の西方を南東から北西に流れる弘田川ぞいにも弥生時代の遺物が多く、弘田川が瀬戸内海に流れ込む多度津白方周辺には、多数の古墳が存在することも知られており、この二本の河川が、旧練兵場遺跡を中心とする善通寺市一帯の古代文化成立の重要な要因となり、その後の繁栄にも大きく関与していることは言うまでもない。

旧練兵場遺跡の中心とされる四国農業試験場の西700m、善通寺西遺跡の北600mのところに、弘田川が大きく蛇行してきた半円形の土地がある。ここに善通寺自動車学校が建設されたのは昭和37年のことであり、工事中に多数の弥生土器や甕棺が出土したことから、何等かの遺構の存在が考えられていた。昭和58年には自動車学校が移転し、河川改修工事によって弘田川が自動車学校跡地を南北に縦断する形で付け替えられることになり、遺構の破壊が考えられたため、遺跡の内容・範囲などを確認する必要が生じ、昭和59年4月から昭和60年3月にかけて発掘調査を実施することとなった。



第3図 昭和37年発見の小甕棺（善通寺市郷土館蔵）



第4図 彼ノ宗遺跡発掘調査区全図

第三章 調査の概要

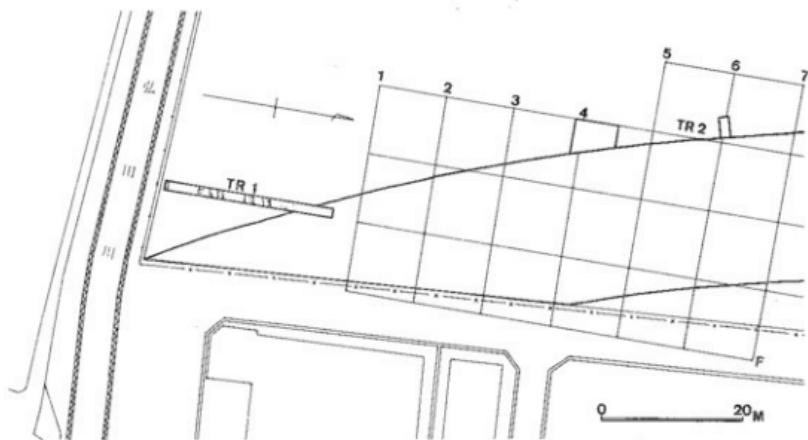
調査区は普通寺自動車学校の移転後、アスファルトだけが除去された状態で放置され、自動車学校建設時の整地層が露出しており、地表面では遺物は全く確認できなかった。また調査区は、自動車学校以前には練兵場として使用されていた期間もあり、遺構破壊の懸念はあったが、昭和59年4月2日から杭打ちを行い、予備調査を兼ねて重機による表土剥ぎを開始した。

発掘調査対象区は弘田川の改修部分であるため、自動車学校跡地の東端を南北に幅21.70m・延長167.50mの狭長な形の設定となった。ここに磁針方位に併せて南北に、10mの間隔を置いてAライン～Eライン、東西にも同様に1ライン～17ラインを設定し、10×10mグリッドを51個配置し、グリッド番号は南西隅の杭番号で代表した。1ラインより南の部分にはコンクリート塊が多数露出しており、かなり深部まで攢乱されてしまっているようなのでグリッドは配置せず、Dラインの延長上に幅2mの第1トレンチを設定し、発掘はD₁・E₁グリッドから開始した。その結果D₁・E₁グリッドでは自動車学校の整地層を20cm程取り去ると遺構面が現われた。遺構面は予想より浅い地点で確認されたが、攢乱されている部分は少なく、比較的良好な遺存状態であることが判明した。

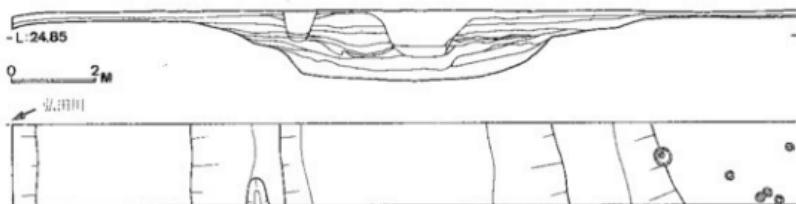
遺構は丸龜平野において通常地山とされている灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層上に黒い大小の班点状に存在しており、検出した結果、弥生時代中期から後期末にかけての竪穴住居・土坑・柱穴、小児壺棺墓などが複合していることが判明した。また、上



第5図 発掘前の調査区風景（南から）



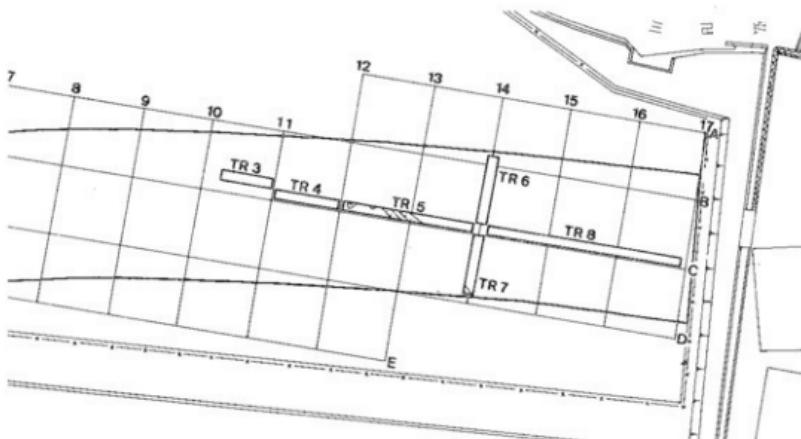
第6図 グリッド



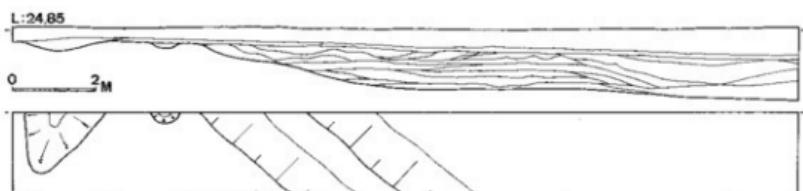
第7図 第1トレンチ平面・断面図

部を削平されてしまっている竪穴住居や小児壺棺墓の状態からみて、実際の遺構面は少な
くとも40cmは上にあったと考えられるが、現状から当時の地表面を復原することは困難で
あると思われる。

調査区南端の遺構の範囲及び旧地形を把握することを目的とした第1トレンチの結果、
1ライン上で確認された竪穴住居より南ではほとんど遺構が存在していないことが判明し
た。さらにトレンチの中央部にて、現弘田川と平行して流れる幅12mの溝が検出され、環
濠かとも思われたが埋土が全て砂層か砂礫層であり、最下層から近世陶器片が出土したこ
と・溝の中央上部に練兵場の整地層の落ち込みが見られることから、ごく最近まで機能し
ていた弘田川の旧河道であると推定される。弘田川は頻繁にその流路を変えていたよう
であるが、基本的にはこの付近に流れをもち、遺跡は旧弘田川の流れを大きく迂回させること
ができる程の小丘陵上に存在していたと考えられる。また、自然河川を利用した環濠集



トレンチ配置図



第8図 第5トレンチ平面・断面図

落の存在も可能性の範疇に入れておく必要があると思われる。

さらに2ラインより北でもD₁・E₁グリッド同様に濃厚な遺構の存在することが予測されたので、10mおきに擾乱層剥ぎ取り・遺構検出・実測を順次行いながら発掘作業を進めた結果、11ラインに至るまでは種々様々な遺構が密集・複合した状態で検出された。しかしながら11ラインから北では擾乱がひどく、擾乱層が地山下の疊層付近にまで達しており遺構が認められなかったため、B₁₀・H₁₁グリッドでは擾乱層を取り除いた後、Cラインにそった幅2mの第3・4トレンチを設定し、遺構の消滅していることを確認した。

遺構は1ラインから11ラインまでの間に極めて密に複合しており、弥生時代中期から後期末にかけての堅穴住居38棟を中心に、多数の不明土坑・柱穴・墓域と推定される小児壙棺墓群などが検出された。また、古墳時代後期の掘立柱建物跡2棟とそれに伴うと考えられる溝が2本、9ラインから11ラインの間では古墳の基底部と推定される2本の周溝も検

出され、それぞれの遺構からは質量共に豊富な遺物が出土している。

遺構・遺物についての詳細な説明は、後の頁で個別に述べることとする。

11ラインから北では、第3・4トレンチの結果から遺構が消滅していることが確認されたが、調査区南端の第1トレンチによって検出された溝に相当する弘田川の旧河道の存在が調査区北端でも考えられたため、未調査部分に幅2mのトレンチを14ライン・Cラインに併せて十字に設定し、探査を開始したところ、第5トレンチの中央部から第7トレンチの東端にかけて、SW-NWに走る落ち込みが検出された。この落ち込みの埋土は第1トレンチで検出された溝の埋土と同様に砂層と砂礫層ばかりであり、弘田川が次第に現在の位置に流れを移したことが土層の堆積状況からわかるが、やはりここも最近まで機能していたらしく、下層部分から近世陶器片が出土している。

第9図
第1トレンチ検出状況
(TR-01、北から)



第10図
S X-01壺棺出土状況
(東から)



発掘作業は昭和59年11月28日で無事終了し、その後は発掘現場の仮設事務所内で遺物整理を翌年3月30日まで行った。出土した遺物は弥生時代中期から古墳時代後期にかけてのもので、その内容も日常生活に密着した各種土器・石器類から祭祀遺物、獸骨片から炭化種子類など極めて豊富であり、丸亀平野における弥生時代を中心とした主要集落の発生・発達の過程を研究する上で非常に貴重な資料であると言えよう。

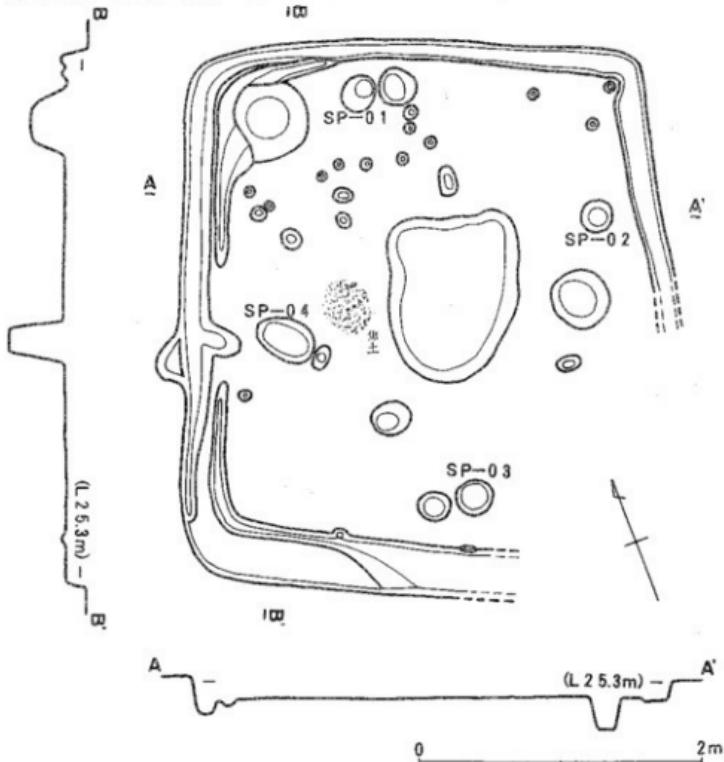


第11図
発掘作業風景
(調査区南端、北から)



第12図
検出された遺構面
(調査区南端、北から)

1. 弥生時代の遺構と遺物 ①竪穴住居



第13図 ST-01 平・断面図

ST-01

ST-01は長軸が3.97m・短軸が3.47mの隅丸方形の竪穴住居で、長軸方位はN-22°-Eを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは16cm・床面の平均レベルは25.18m、床面の面積は約13.20m²である。床面の周囲には幅10~20cm・深さ5~10cmのU字形の断面を呈する周溝が不規則にめぐらされている。埋土は土器片と小礫を多量に含んだ黒褐色土のみであり、層序は認められなかった。

床面では多数のピットが検出されたが、大きさ・深さ・埋土などから、住居の柱穴と推定されるものはSP-01~SP-04の4個であり、いずれも隅丸方形住居の隅にではなく各壁面中央部寄りに配置されている。床面中央には90×110cm・深さ15cm程の浅い、住居と同一の黒褐色土の埋土をもつ土坑が検出されたが、土器片は少なく炭化物が多く含まれ

ていた。性格は不明である。

S T - 01は南東隅を一部掘削されてしまつてはいたが、住居そのものの遺存状況は良好であり、中央土坑の西側床面の一部が30×40cmにわたり焦土となつてゐるのが確認できた。また、そのそばから浅鉢と支脚が、南側壁面に添う溝の中からは獸骨片が二点出土している。埋土中に含まれていた土器片は小片ばかりであり、時期も弥生時代中期前葉から後期末にかけてのもので、住居が廃棄された後に土砂と共に混入したものと考えられるが、一点だけ住居中央部にて埋土中から完全な形で出土した土器がある。これは表面に叩き調整のある粗い作りのもので、注ぎ口と取っ手を持ち水差しの一種と考えられ、その特徴からみて、床面より出土した浅鉢・支脚とほぼ同時代の遺物であると思われる。

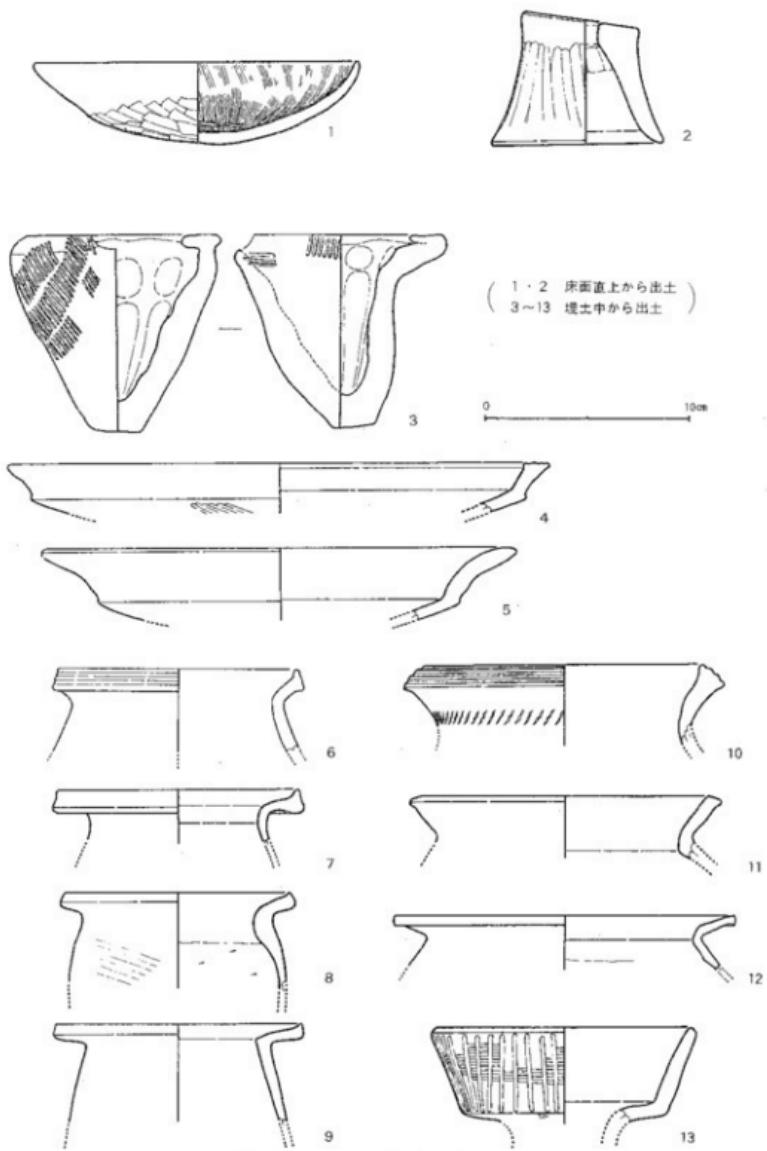
出土した遺物や住居形態などを検討した結果、S T - 01は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。



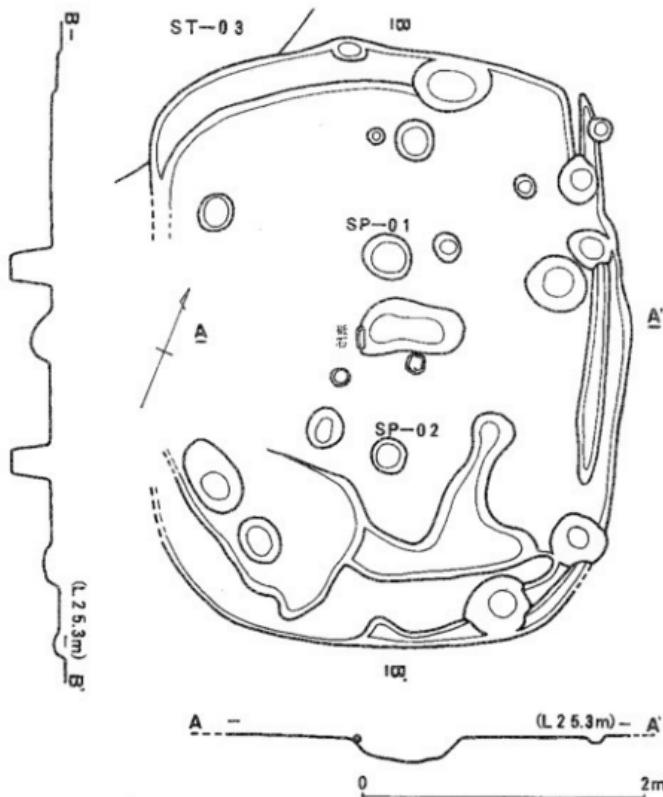
第14図
S T - 01 (北から)



第15図
S T - 01 (西から)



第16図 ST-01出土遺物実測図



第17図 ST-02 平・断面図

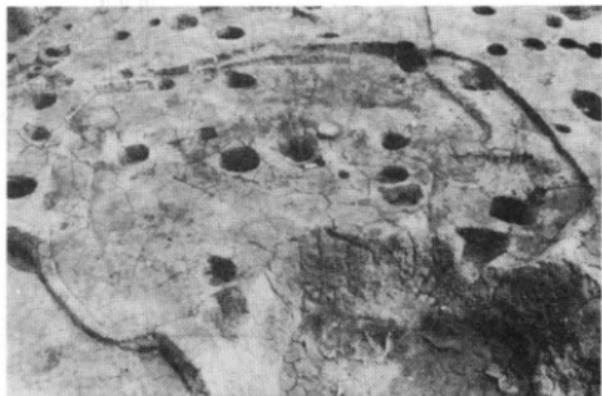
ST-02

ST-02は長辺が4.27m・短辺が3.20mの隅丸方形に近い不整円形の竪穴住居で、長軸方位はN-23°-Wを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは10cm・床面の平均レベルは25.17m・床面の面積は約12.43m²である。床面には東壁と南壁に添って幅10～15cm・深さ4～8cmの溝があり、北壁と南壁には幅20～40cm・高さ5cm程の張り出し部が認められた。埋土は小礫を含んだ黒褐色土のみであり、遺物はほとんど含まれておらず層序も認められなかった。

床面では時期差のあるものも含めて多数のピットが検出されたが、大きさ・深さ・埋土などから住居の柱穴と推定されるものはSP-01・02の2個であり、いずれも主軸線上に配置されている。床面中央では40×80cm・深さ15cm程の小さな土坑が検出された。土坑の埋土は住居の埋土と同一であった。遺構の上部のはほとんどは削平されてしまっており、埋土に

含まれる遺物の量は非常に少なく、床面でも遺物は全く認められなかつたが、床面中央の土坑西側の淵で10cm程の乳灰色を呈する硬質な凝灰岩製の砥石が出土しており、これには長期間にわたつて使用した痕跡がみられる。また東壁面添いの溝の上部で埋土中から、獸骨片が6点・1.5cm程の大きさの炭化種子が4点出土している。

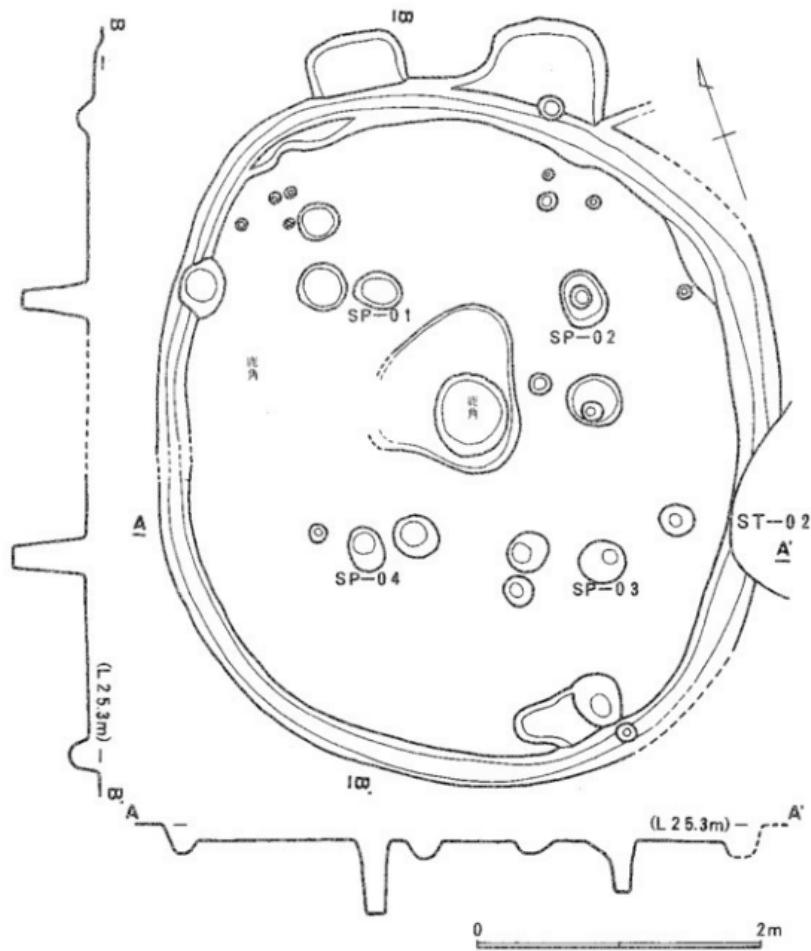
S T - 02からは遺構の構成時期を限定できるような遺物の出土はなかつたが、弥生時代中期前葉から後期中頃にかけての土器片が出土したS T - 03との切り合い関係や、住居の形態・埋土などを検討した結果、S T - 02は弥生時代後期後半以後に機能し廃絶したと考えられる。



第18図
S T - 02 (北から)



第19図
S T - 02 (西から)



第20図 ST-03 平・断面図

ST-03

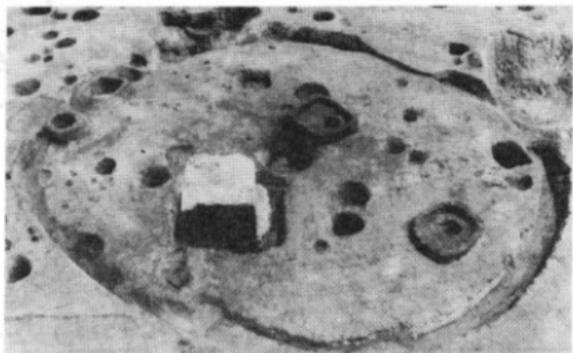
ST-03はN-20°-Eに長軸方位をもつ椭円形の竪穴住居跡であり、検出された遺構面から床面までの深さは13cm・床面の平均レベルは25.18m・床面の面積は17.49m²である。床面の周囲には幅20~30cm・深さ10~15cmのU字形の断面を呈する周溝がめぐらされている。また、この住居の北端部には二個所に70×40cmと90×60cmの方形の小段がみられるが、上部がほとんど削平されてしまっており性格は明らかにできない。

この住居の埋土は土器片を多く含む暗茶褐色土のみであり、層序は認められなかった。

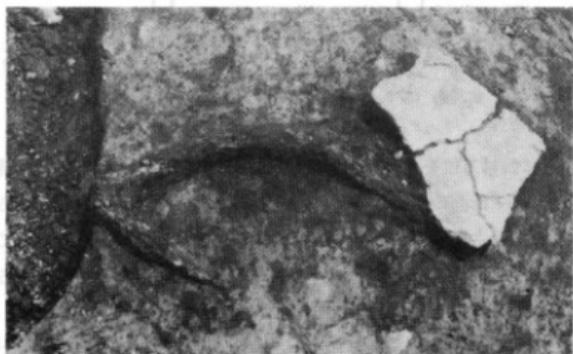
床面では時期差のあるものも含めて多数のピットが検出されたが、大きさ・深さ・埋土などから、この住居の柱穴と考えられるものは S P -01~04 の 4 個であり、バランス良く方形に配置されている。床面中央には $100 \times 120\text{cm}$ ・ 深さ 10cm ・ 一部深さ 37cm のピット状の掘り込みのある土坑があり、埋土は炭化物を多く含んだ暗茶褐色土で、中から切断面をもつ鹿の角の一部が出土しているが、遺構の性格は不明である。また、住居内北西隅においても床面直上から、丁度置き忘れられたかのような格好で鹿の角が出土している。

S T -03 の床面及び周溝中からは多量のサヌカイト片が出土しており、そのうち幾つかは接合可能である。また、埋土中からはサヌカイト片の他、石鏃・石包丁・不定形石器・棒状の小さな砥石・一部研磨された緑泥片岩の叩き石など多数の石器類と、弥生時代中期前葉から後期中頃にかけての弥生土器片・獸骨片 1 点・炭化種子 1 点が出土している。

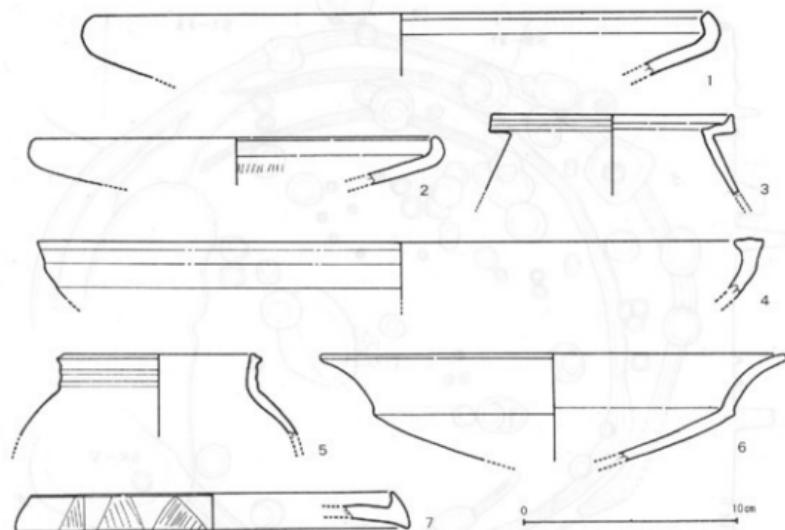
出土した遺物や埋土・住居形態・S T -02との切り合い関係などを検討した結果、S T -03は弥生時代後期中葉頃に機能し廃絶したと考えられる。



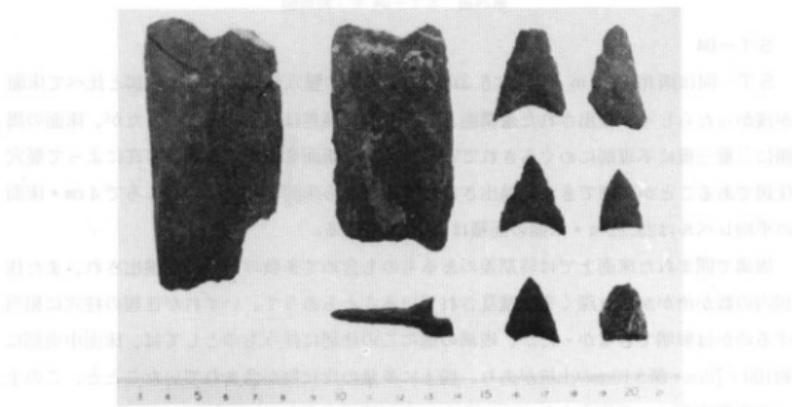
第21図
S T -03 (西から)



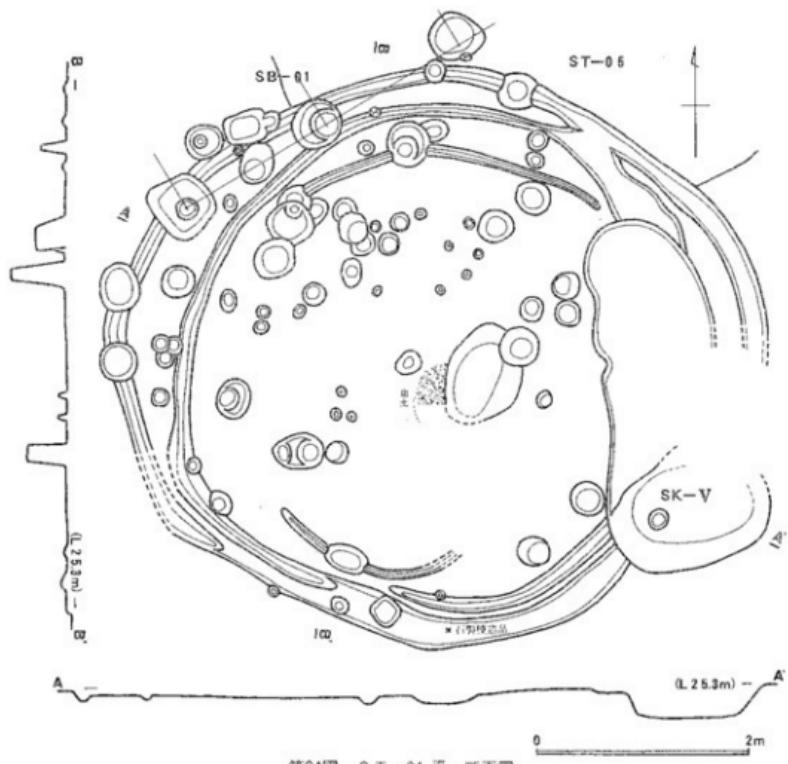
第22図
鹿角の出土状況



(1~7はいずれも埋土中から出土
写真(下)は床面直上出土の石器類)



第23図 ST-03出土遺物実測図



第24図 ST-04 平・断面図

ST-04

ST-04は南北に5.5m・東西に6.3mの不整円形の竪穴住居で、他の住居と比べて床面が浅かったらしく、検出された遺構面と床面との比高差はほとんどなかったが、床面の周囲に二重三重に不規則にめぐらされているU字形の断面を呈する周溝の存在によって竪穴住居であることが確認できた。検出された遺構面から床面までは深いところで4cm・床面の平均レベルは25.22m・床面の面積は25.33m²である。

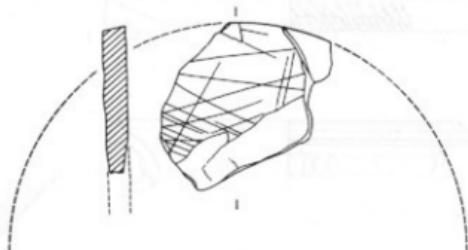
周溝で開まれた床面上では時期差のあるものも含めて多数のピットが検出され、また住居内の数か所がかなり深くまで攢乱されていることもあって、いずれが住居の柱穴に相当するのかは解明できなかったが、周溝の他にこの住居に伴うものとしては、床面中央部に約100×70cm・深さ10cmの土坑があり、埋土に多量の炭化物が含まれていたことと、この土坑の西側床面に一部焦土となっているところが確認できた。

遺物は遺構の床面から上が完全に削平されてしまっており、周溝の深い部分で、数mmの

サヌカイト片を多く含む茶褐色砂質土から数点の弥生土器片と磨製石斧片1点・滑石製模造品片1点が出土しただけであった。滑石製模造品は暗緑色のもので表面は磨かれ格子文状の線刻が認められる。端部は円弧を呈しており円盤状の石製品が想像できるが、破片が小さいため本来の形状・用途は明らかではない。

ST-04から出土した弥生土器は遺構の構成時期を判定するにはとぼしいが、いずれも凹線文の取り入れ始められた時期のものであることがわかる。またST-04の周辺には、弥生時代中期中葉前半の凹線文を持たない北谷式と併行する時期の土器を中心に、凹線文の手法が取り入れ始められた頃の土器がわずかに出土する土坑が多数確認できているが、これらに相当する時期の住居が他に見られない。そして、ST-04の東端にて遺構を切っている土坑・SK-Vからはやはり凹線文の手法が取り入れ始められた頃の土器が出土している。

以上のことと検討した結果、ST-04は弥生時代中期中葉前半に機能し廃絶したと考えられる。

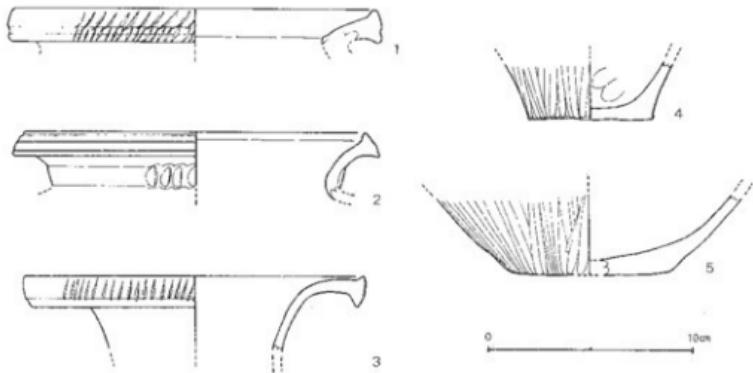


第25図 滑石製模造品実測図（原寸）



第26図

ST-04（北西から）

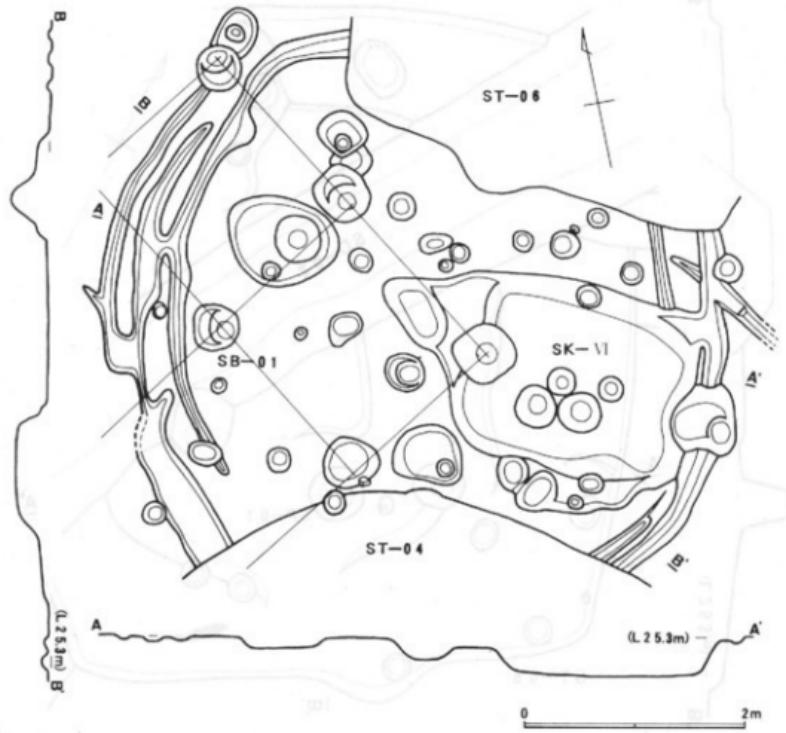


第27図 ST-04出土遺物実測図 (1~5 床面直上から出土)

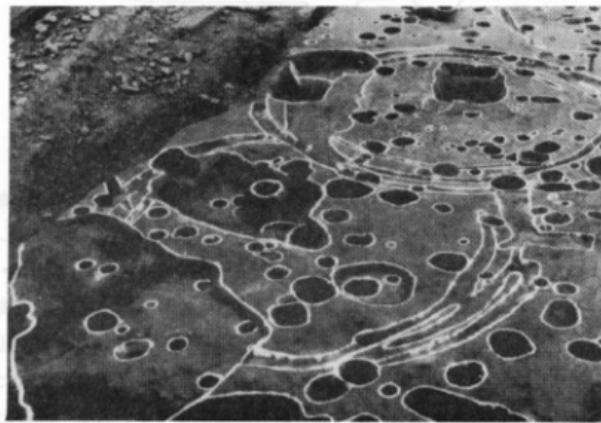
ST-05

ST-05は東西に5.74mの不整円形の竪穴住居でST-04と全く同じ形態を示しており、やはり他の住居から比べると床面が浅かったらしく、検出された遺構面と床面との比高差は全くみられず、床面の周囲に二重三重に不規則にめぐるU字形の断面を呈する周溝と多数のピットが検出されただけである。周溝で囲まれた床面の面積は 25.5m^2 前後と考えられるが、弥生時代後期末の竪穴住居・ST-06によって北東部を、ST-04によって南部を切られており正確な数値は求められない。また住居の床面の東半分をSK-VIによって掘削されている。床面上の多くのピットについては、いずれが住居の柱穴に相当するのか解明できなかった。

遺物については遺構の床面から上が完全に削平されてしまっており、残された周溝を埋める、数mmのサヌカイト片を多く含む茶褐色砂質土からも磨製石斧の破片が一点出土しただけであった。しかしながら、ST-05の床面の東寄りにある $2 \times 1.7\text{m}$ ・深さ35cmの土坑・SK-VIからは、弥生時代中期中葉前半の全く凹線文の手法をみない北谷式と併行する時期の上器片ばかりが出土しており、ST-05との切り合い関係や埋土などから判断して、両者は同一時期か若しくはより近接した時期の遺構のようである。またST-04によって切られていることなどから、ST-05は弥生時代中期中葉前半で、ST-04よりやや古い時期に機能し廃絶したと考えられる。



第28図 ST-05 平・断面図

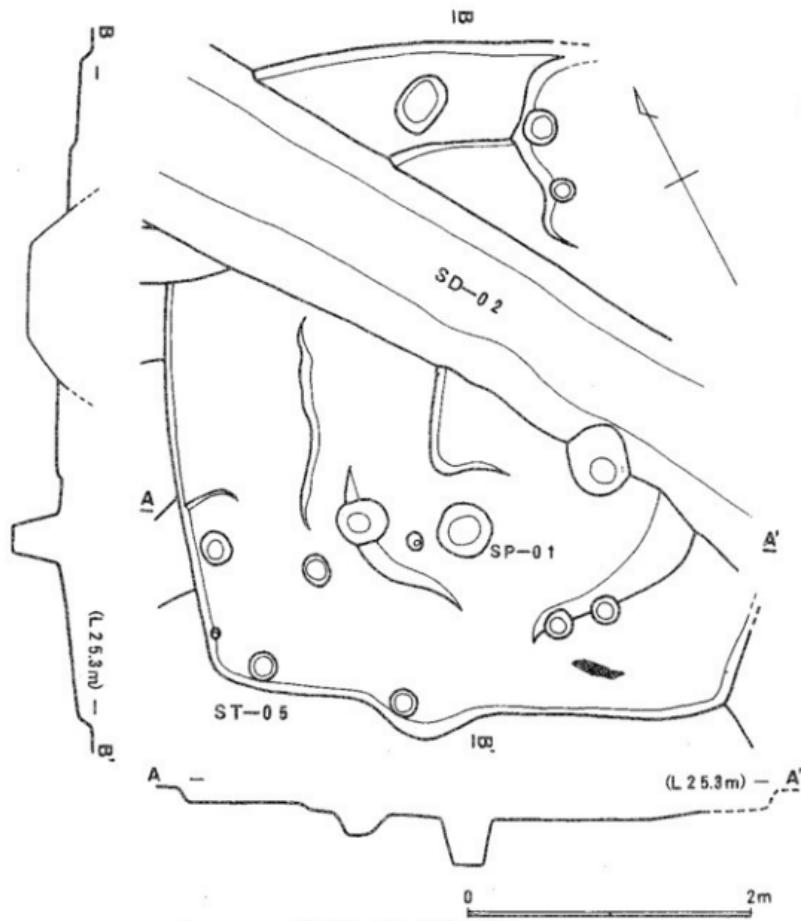


第29図

ST-05 (北西から)

左下がST-06

右上がST-04



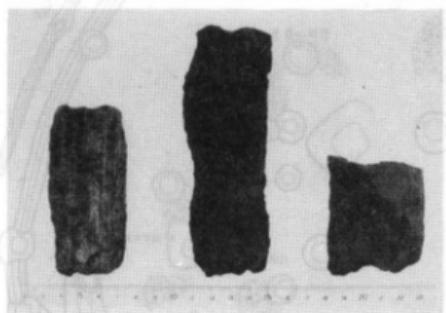
第30図 ST-06平・断面図

ST-06

ST-06は長軸が4.78m・短軸が約4.30mのやや胴張りの隅丸方形の竪穴住居で、長軸方位はN-26°-Eを向いている。住居の床面は周囲が中心に向かってゆるやかに傾斜し、床面中央部分は平坦になっており、検出された遺構面からこの平坦部分までの深さは22cm。レベルは25.02mである。床面の面積については18.40m²前後と考えられるが、古墳時代後期の溝・SD-02によって住居の中心を掘削され、東端部分を現代の建物跡によって埋められてしまっているために正確な数値は求められなかった。また床面上に多数検出されたビットについても、住居の柱穴に相当するものはSP-01しか確認できず、ST-02のよ

うに主軸線上に二本の柱穴を持つ構造が考えられるが詳細は不明である。

住居の埋土は黒褐色土のみで層序は認められなかった。埋土中からは少量の土器片の他、石包丁が三点・獸骨片が二点出土しただけで、遺構の構成時期を知り得るような遺物は認められなかつたが、住居の形態や埋土などから弥生時代終末期頃に機能し廃絶したものではないかと考えられる。



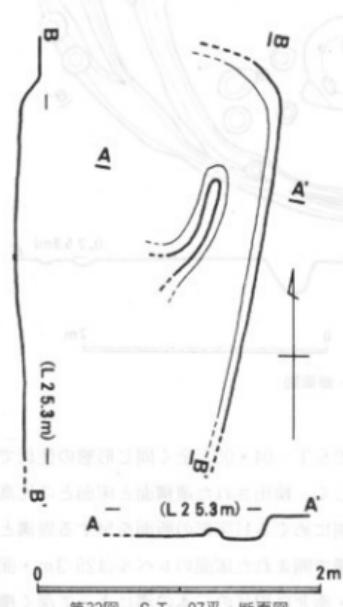
第31図

S T - 06出土遺物

左：紅レン片岩製（使用痕あり）

中：サスカイト製

右：サスカイト製（使用痕あり）

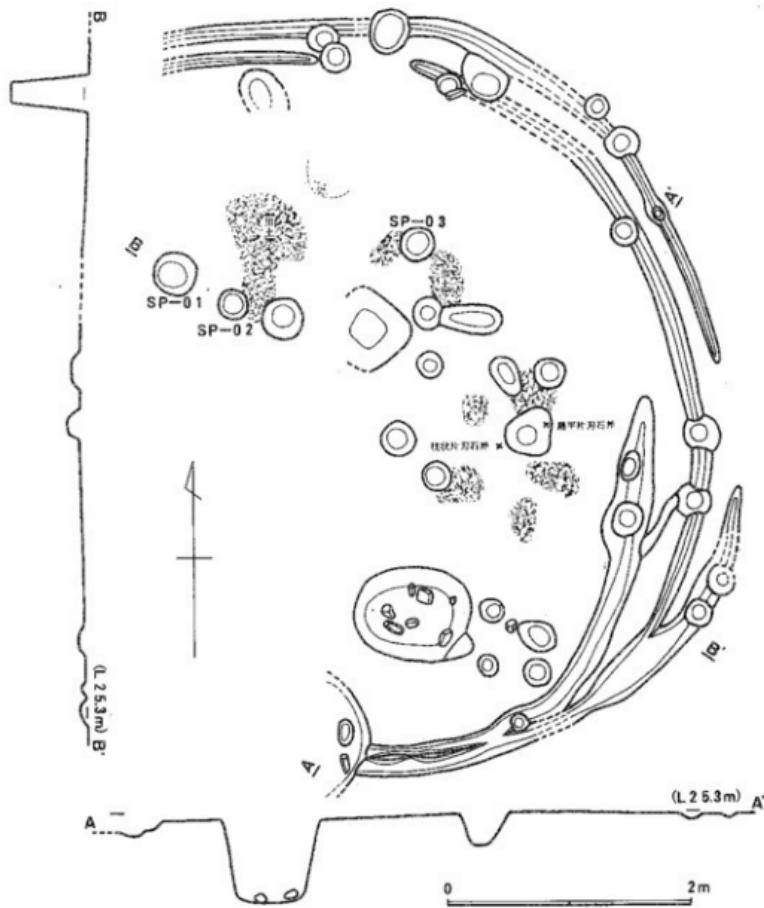


S T - 07

S T - 07はD - 2 グリッドにおいて発掘区西壁添いに一部分だけが検出された遺構で、出土した遺物も黒褐色の埋土に含まれていたわずかな土器片のみであった。

検出された範囲内での遺構の深さは20cm・方位はN - 12° - Eを向いているが、その大部分が発掘区外にあるため詳細を解明することはできなかつた。しかしながら、遺構は形がしっかりしており、柱穴を検出するまでは至らなかつたが、その形態や遺構の方位からみて弥生時代後期末頃の竪穴住居北東隅の部分である可能性が高い。

第32図 S T - 07平・断面図



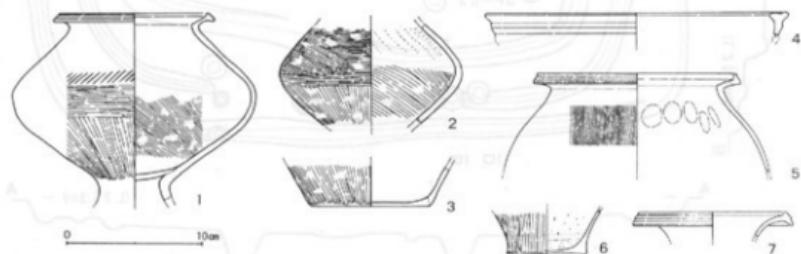
第33図 ST-08平・断面図

ST-08

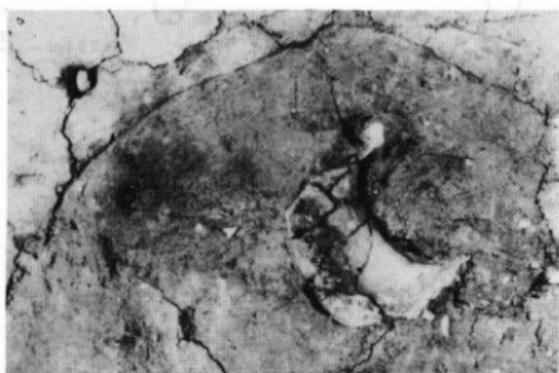
ST-08は南北に6.26mの不整円形の竪穴住居でST-04・05と全く同じ形態の住居であり、やはり他の住居と比べて床面が浅かったらしく、検出された遺構面と床面との比高差は全くみられず、床面の周囲に二重三重に不規則にめぐるU字形の断面を呈する周溝と多数のピットと土坑が検出されただけである。周溝で囲まれた床面のレベルは25.3m・面積は30m²前後であると考えられるが、床面を東西・南北に現代の二本の溝によって深く擾

乱され、西端部が発掘区外となっているため正確な数値は求められず、柱穴についても検出されたピットのうちSP-01～03が相当すると考えられるが、他は不明である。

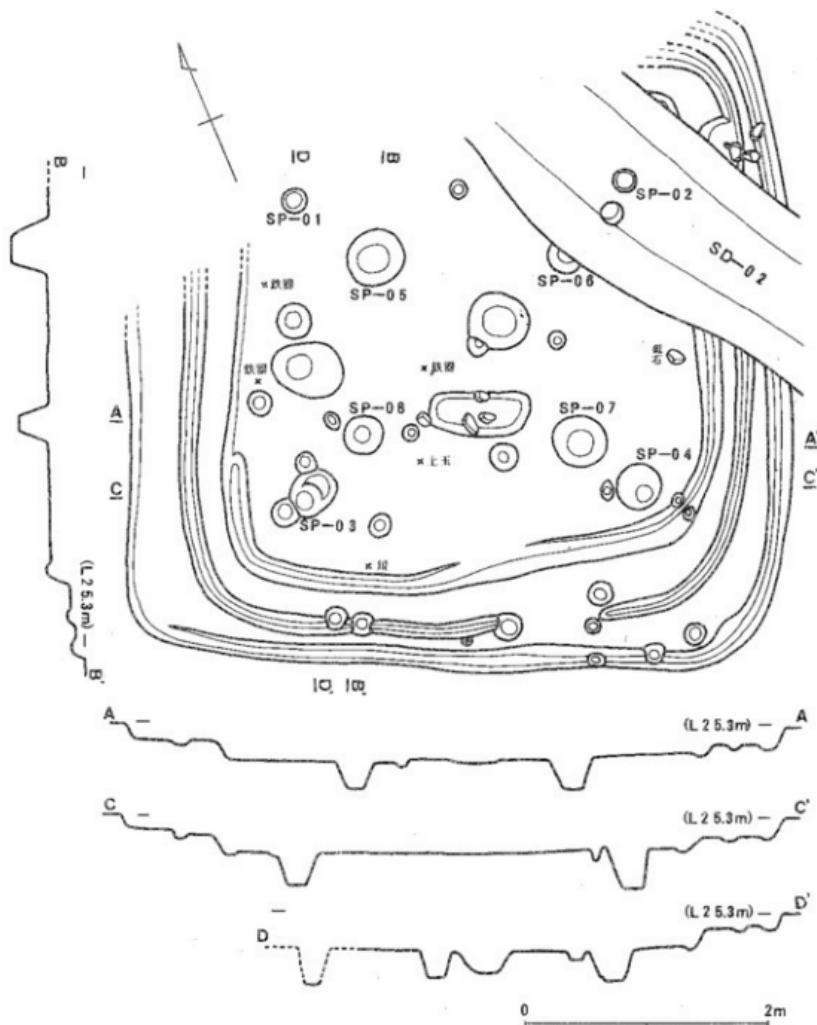
遺物については遺構の床面から上が完全に削平されてしまっており、残された周溝の茶褐色砂質土の埋土からもサヌカイト片がわずかに出土しただけである。しかしながら、床面東寄りの39×44cm・深さ28cmの土坑から、弥生時代中期中葉の凹線文の手法を取り入れはじめた頃の土器と安山岩製の扁平片刀石斧が、この土坑のそばからは床面に垂直に突き刺した状態で緑色片岩製の柱状片刀石斧が出土している。床面南端には77×96cm・深さ67cmの土坑があり、埋土は周溝のものと同じ茶褐色砂質土であった。中にはこぶし大の河原石と炭化物を多量に含んでいたが土器はほとんど出土しなかった。また床面上には焦土となっている部分が9か所に散在しているのが認められた。これらはいずれもST-08に伴う遺構であり、遺物の出土状況と内容・住居の形態などを検討した結果、ST-08は弥生時代中期中葉頃に機能し廃絶したと考えられる。



第34図 ST-08出土遺物実測図 (1～7 床面上の土坑から出土)



第35図
遺物の出土状況
(左上隅：柱状片刀石斧)



第36図 S T - 09平・断面図

S T - 09

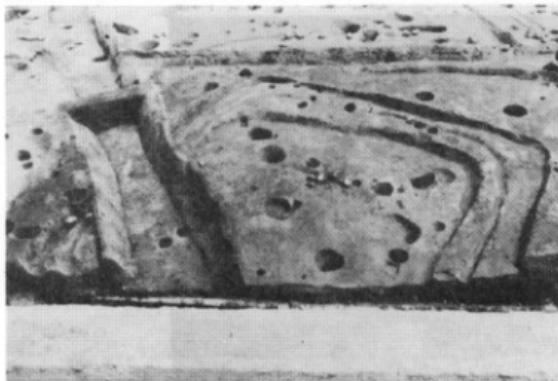
S T - 09は一辺が約5.5mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方位はN-23°-Eである。古墳時代の溝・S D - 02によって東端を、現代の配水管の埋設によって北端を一部掘削されてしまっているが、全体的にみて遺存状況は良好であり、床面では四隅で柱穴と考えられるピットが対角線上に2個づつ計8個配置されており、二重の方形プランになってい

る。またSP-07と08の間には35×85cm・深さ5cmの長方形の浅い土坑があり、埋土は炭化物・小礫を多く含む黒褐色土で、そばから火で焼かれた痕のある10cm程の砂岩が4個出土している。

床面の周囲にはベッド状遺構と呼ばれる張り出しが認められる。これは幅50~60cm・高さ15cm前後であり、竪穴住居内部の面積のはば半分を占めており、ベッド状遺構の中央と、床や壁面の境には平行する三重の周溝がめぐらされている。溝はいずれも幅10cm前後・深さ5cm程のU字形の断面を呈する小さなもので、随所で切れており、遺構の状態からみてもこれが排水を目的とした施設であるとは考えられず、その性格は不明である。

ST-09の埋土は黒褐色土のみであり、層序は認められなかった。埋土からは多量の土器片が出土したがそのほとんどが小片で、時期も弥生時代中期前葉から後期末にかけてのもので、この遺構の構成時期を判定し得る遺物としては、床面直上から出土した遺物と埋土下層部からほぼ完全な形で出土した数点の土器を対象とした。

遺物の中で最も注目されるものは、住居南西隅の床面直上から出土した懸垂鏡に転用された小形彷製鏡片である。これは復原径8cm程のもので、長期間土中に埋もれていたとは思われぬ程美しい白銅色を呈しており鏽も見られず、極めて良好な遺存状態であった。銅鏡の縁は幅狭で断面は蒲鉾形をしている。背文は外から順番に縁・斜行櫛歯文帯A・圓線・斜行櫛歯文帯B（Aと逆向き）・圓線？・内行花文帯？・あとは欠損のため不明となっている。背文は斜行櫛歯Aを除いて非常に見づらくなっているが、これは鏽上がりの悪さばかりではなく端部や欠損部分までがかなり磨滅していることから、手擦れによるものであると考えられる。外側の斜行櫛歯文帯中には懸垂の目的で開けられた直径3mm程の小円孔が2個あるが、いずれも懸垂時に紐の接触していた部分が磨滅しふくらんでおり、その延長上の縁の上にも2条の紐の痕跡が認められる。試しに糸を孔に通し鏡片を懸垂してみたところ糸とその痕跡は一致した。しかしながら、長期間大切に使用された鏡片が廃棄され



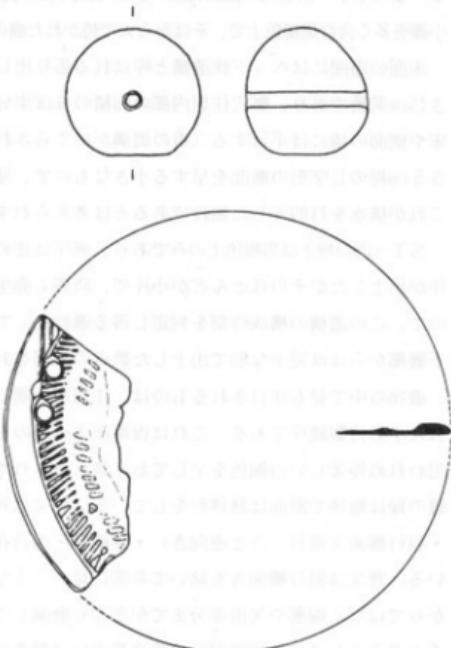
第37図
ST-09（北から）

た住居から出土した点は疑問である。

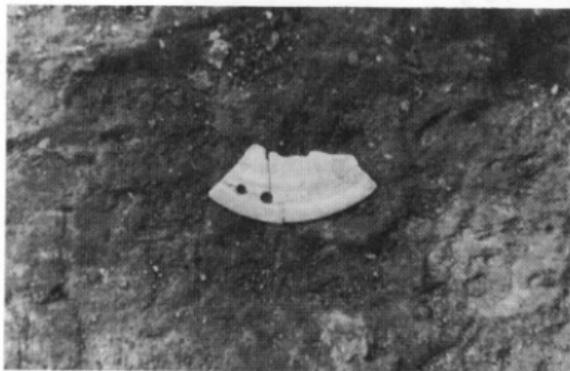
また、ここから南に3kmの大麻山北側の山腹傾斜面に発見された箱式石棺墓群中の墳墓、キッショ塚出土の銅鏡に類例が確認できた。キッショ塚は野田院古墳から尾根づたいに下る標高230mの所に所在したが、開墾のために消滅してしまっている。この鏡は直径8.1cmで背文はほとんど磨滅し、幅狭で蒲鉾形の断面を呈する縁・斜行櫛齒文帯・圓線2条・内行花文帯(12葉)・圓線1条・藏手文?・鋏となっている。

床面直上からは弥生時代後期末頃の土器や鏡片の他にも、土製丸玉1点・鉄器片3点・凝灰岩製の砥石1点が出土しており、土製丸玉は最大径24mmのほぼ球形で中心に直径2mmの孔が空いている。また鉄器片についてはいずれも方形の断面を呈する

細い棒状のものである。ST-09は出土した遺物や住居形態などから検討した結果、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。

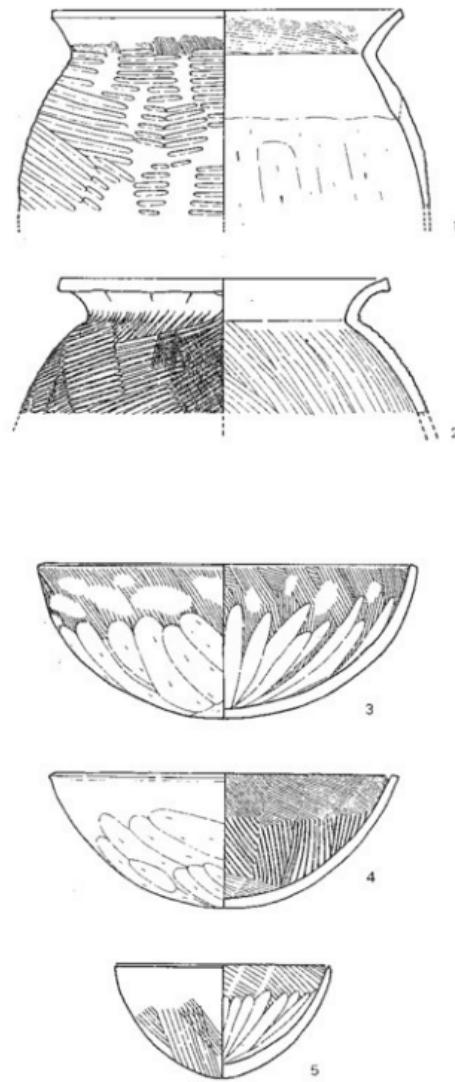


第38図 土製丸玉・銅鏡片実測図(原寸)



第39図

銅鏡片の出土状況



(1・2 床面上から出土
3～5 墓土下層から出土)

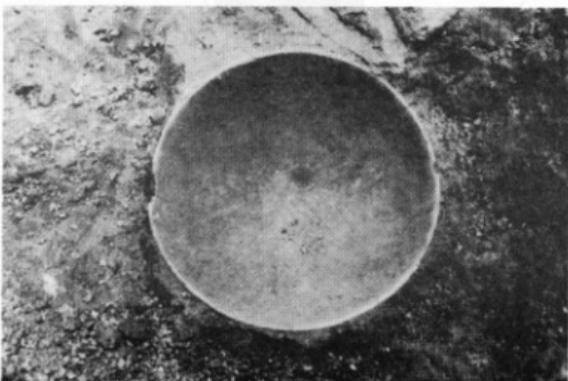
第40図 S T -09出土遺物実測図



第41図
S T - 09 (東から)



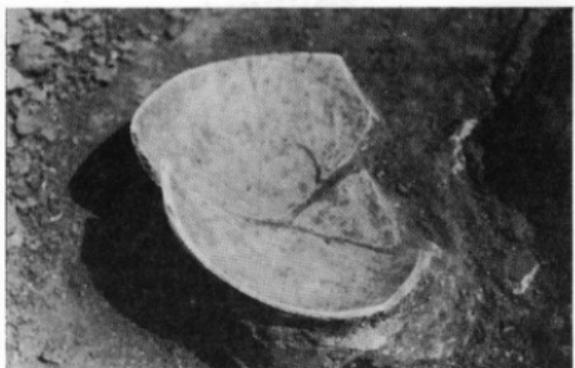
第42図
遺物の出土状況
(S T - 09床面中央)



第43図
遺物の出土状況
(S T - 09埋土下層)

第44図

遺物の出土状況
(S T - 09埋土下層)



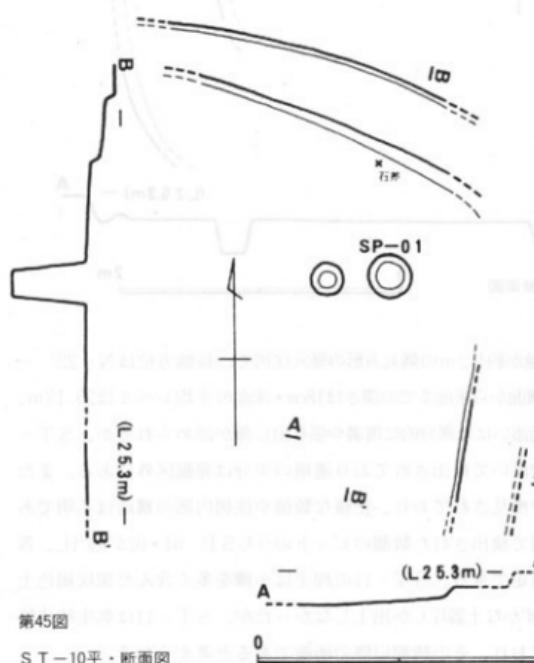
S T - 10

S T - 10はC - 3グリッドの西壁添いに一部だけが検出された隅丸方形の竪穴住居で、出土した遺物も黒褐色の埋土に含まれていたわずかな土器片と、棒状の安山岩の自然石の先端だけを研磨した小型の柱状石斧だけであった。検出された範囲内での床面の深さは24cm・

レベルは25.06m、主軸方位はほぼN - 10° - Eに向いていると思われるが、一部を現代の溝によって深く攢乱され、また遺構の大部分が発掘区外にあるため詳細は不明である。

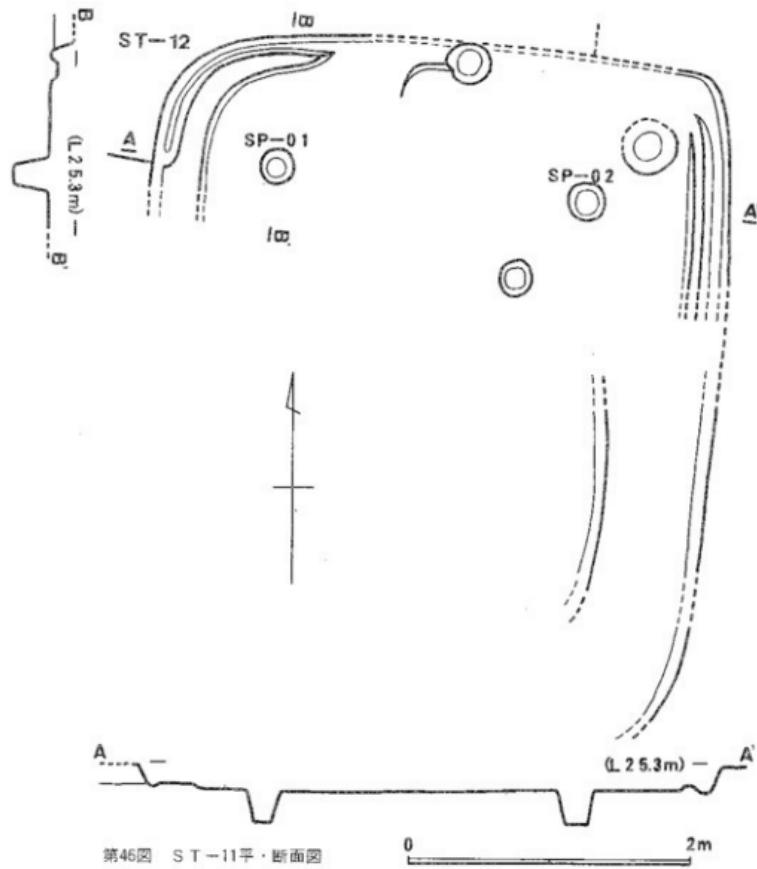
しかしながら、住居の壁面に添ってめぐる幅40cm・床面との比高差10cm程の張り出し状の遺構と、床面北東隅でしっかりした柱穴を検出することができた。

遺構の形態や埋土から検討して、S T - 10は弥生時代後期末頃に機能し廃絶したものではないかと考えられる。



第45図

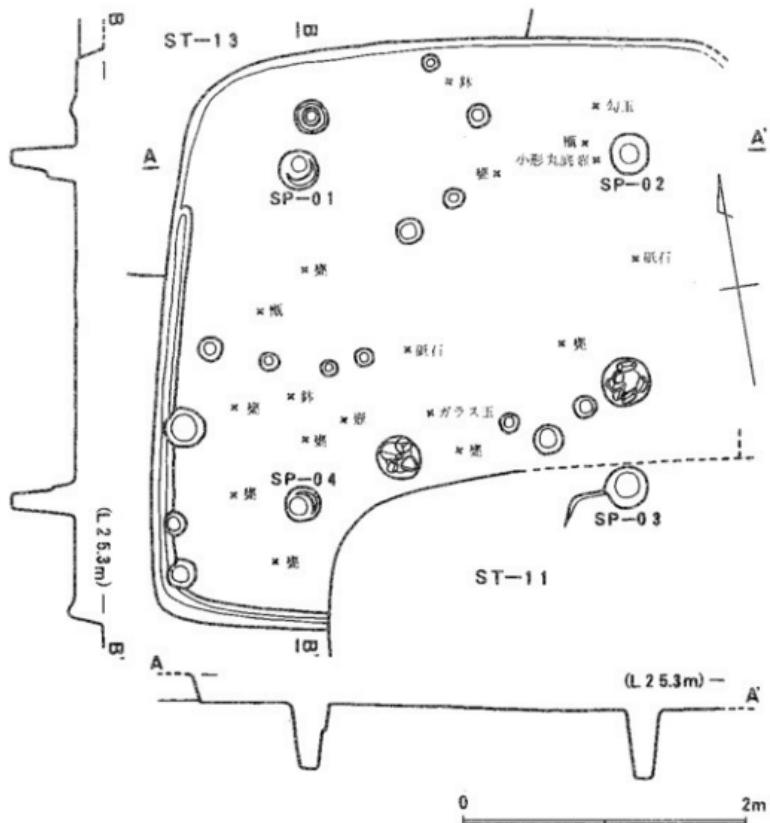
S T - 10平・断面図



第46図 ST-11平・断面図

ST-11

ST-11は長軸が約5m・短軸が約4.2mの隅丸方形の堅穴住居で、長軸方位はN-22°-Eを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは18cm・床面の平均レベルは25.13m、床面の面積は約19m²である。壁面添いには部分的に周溝や張り出し部が認められるが、ST-11はC-3グリッドの発掘区西壁添いで検出されており遺構の半分は発掘区外にある。また一部が現代の溝により深くまで攢乱されており、正確な数値や住居内部の構造は不明である。柱穴については住居の北側で検出された数個のピットのうちSP-01・02が相当し、各隅に合計4本の柱を持つ形態が想定できる。ST-11の埋土は小礫を多く含んだ黒灰褐色土であり、層序は認められず、わずかな土器片しか出土しなかったが、ST-11は弥生時代終末期の遺構・ST-12を切っており、その時期以降の所産であると考えられる。



第47図 ST-12平・断面図

ST-12

ST-12は一边が4.2mの隅丸方形の竪穴住居で主軸方位はN-10°-Eを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは20cm・床面の平均レベルは25.1cm、床面の面積は約15.8m²であり、床面では西壁・南壁の一部に添って幅15cm・深さ6cmのU字形の断面を呈する周溝がみられる。住居の南東隅はST-11に切られており東端は現代の溝によって深く擾乱されてはいるが、遺存状況は極めて良好であり、床面上からは硬玉製勾玉・青色のガラス製小玉・乳灰色でやや硬質の凝灰岩製磁石・灰褐色で板状の小さな砥石の他、甕を中心にして鉢・鉢・壺・小形丸底壺など小形の住居にしては多量の弥生土器が出土している。

ST-12の埋土は黒褐色土のみで層序は認められなかった。また床面で検出された多数のピットのうち、大きさ・深さ・埋土などから住居の柱穴と考えられるものはSP-01~04の

4個であり、いずれも床面隅に正方形に配置されている。

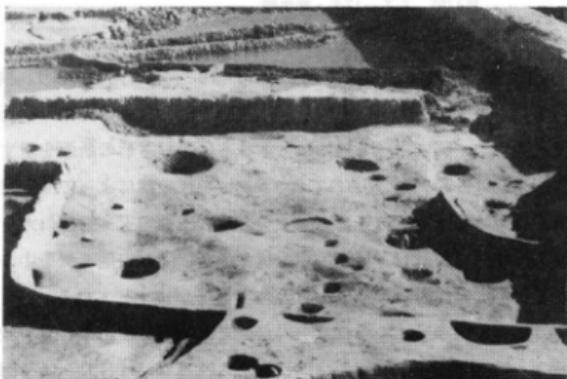
出土した弥生土器はその大半が床面南西隅に集中しているが、その出土状況からみて一括廃棄されたものと考えられ、これらの遺物が全てこの住居に併い使用されたものかどうかは疑問である。しかしながら、この地域における同一時期の土器型式を把握する上で極めて質の高い資料であるといえる。

多量に出土した甕についてはその特徴もはっきりしており、その外形から（A：体部の最大径が体高中央よりもや上に位置し、口縁部が「く」の字形に外折するもの）と、（B：体部最大径がほぼ体高中央に位置し、（A）と比べてかなり胴長で 口縁部が「く」の形に大きく外折するもの）の二型式に分類できる。

この外形による型式のちがいを除けば、その他の特徴はほとんど共通したものがみられる。まず底部についてはいずれの甕も丸味を帯びており、わずかに平底の名残りをとどめる程度であるがまだ完全な丸底のものはない。体部内面には器壁を薄く仕上げるため丁寧にヘラ削りによる調整がなされており、器壁の厚さは4mm前後である。体部外面にみられる最大の特色は粗いたたきの手法であり、それぞれの幅が3mm程の凹部と凸部が交互に斜めや横向きに走るたたき目が認められる。そして、たたき目の上には目の細かい縱向きのハケによる調整がほぼ体部全体になされている。中にはたたき目が頭部より上にまでみられるものもあり、たたきのあとで口縁部が成形されたことがわかる。

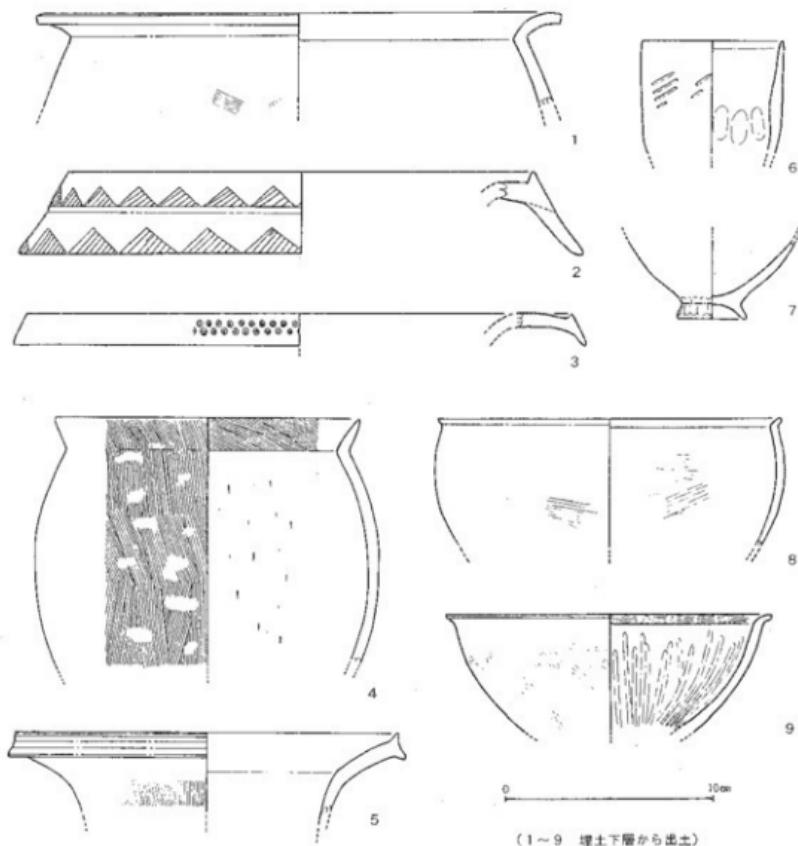
鉢についても甕の底部と同様、わずかに平底の名残りをとどめる程度で丸味を帯びており、甕の底部と同じ断面形を呈する。内面には目の細かいハケによる調整、外面はナデて仕上げており、底部には一部ヘラ削りが認められる。

出土した土器群を検討した結果、これらは庄内I式に併行した時期の遺物であり、ST-12は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。また一緒に出土した極めて特異な形

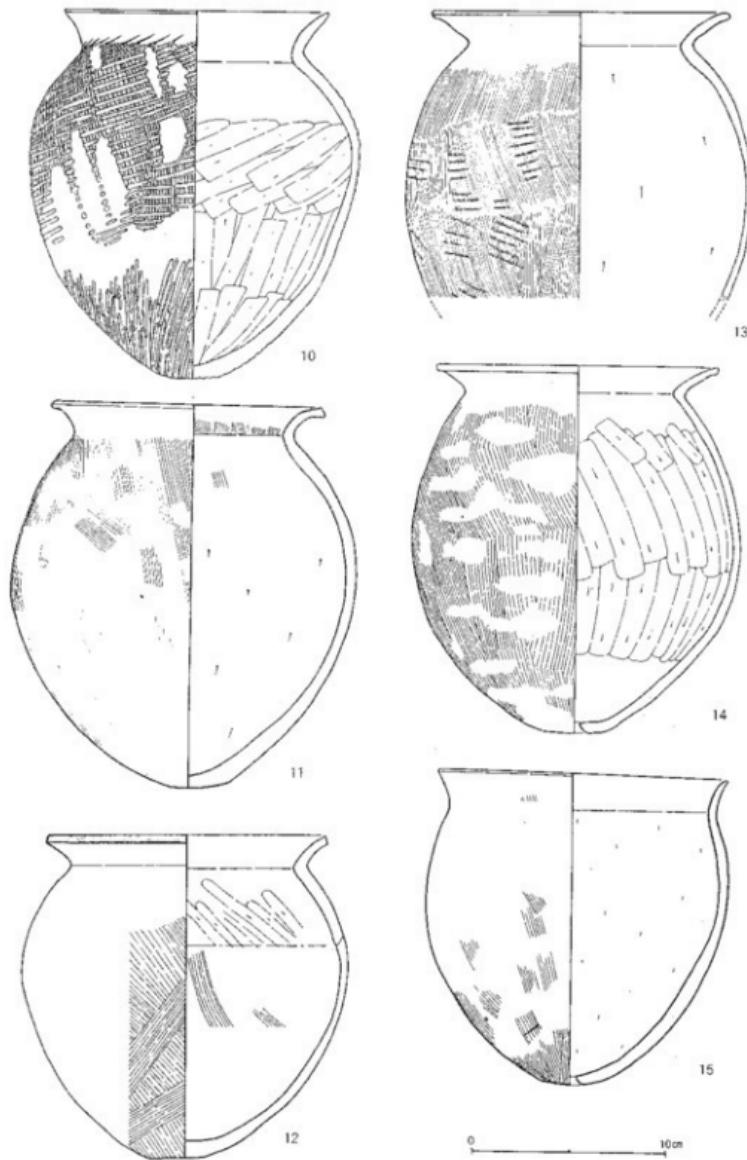


第48図
S T - 12
(拡張後・西から)

である小形丸底壺についても、この地区で比較的多くみられるものであり、これらの甕や鉢と併せて、遺構の時期を決定する上で恰好の一括資料となり得ることが期待できる。



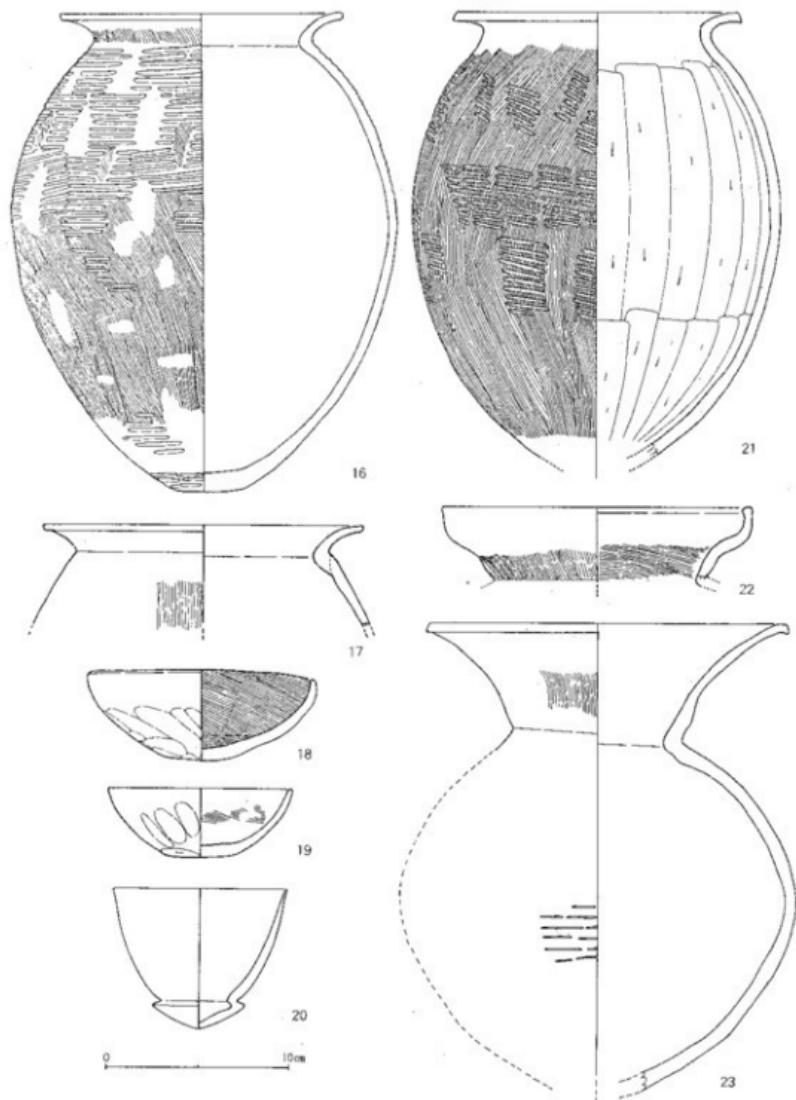
第49図 ST-12出土遺物実測図



第50図 S T - 12出土遺物実測図

(10~15 床面直上から出土)

0 10cm



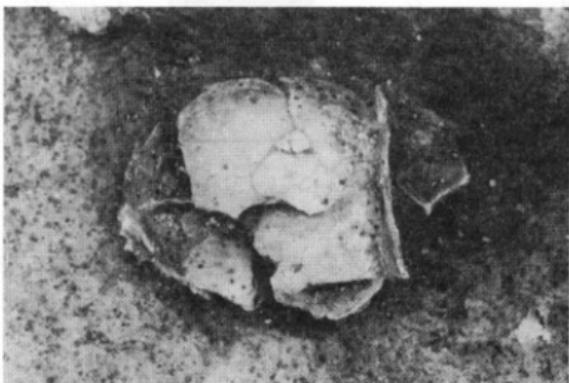
第51図 ST-12出土遺物実測図

(16~23 床面直上から出土)



第52図

S T -12遺物出土状況
(拡張前・西から)



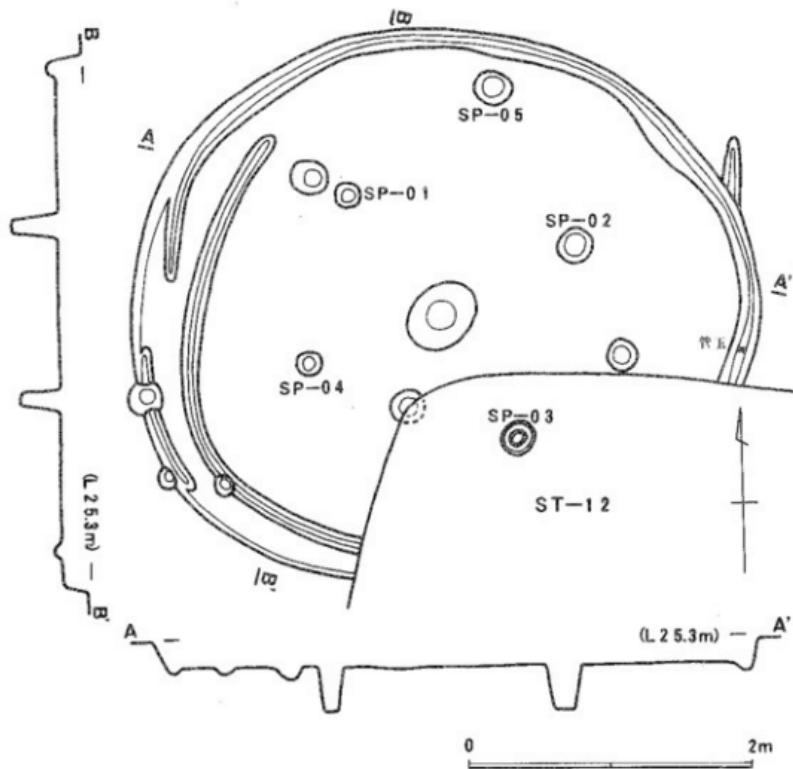
第53図

壺の出土状況



第54図

瓶の出土状況



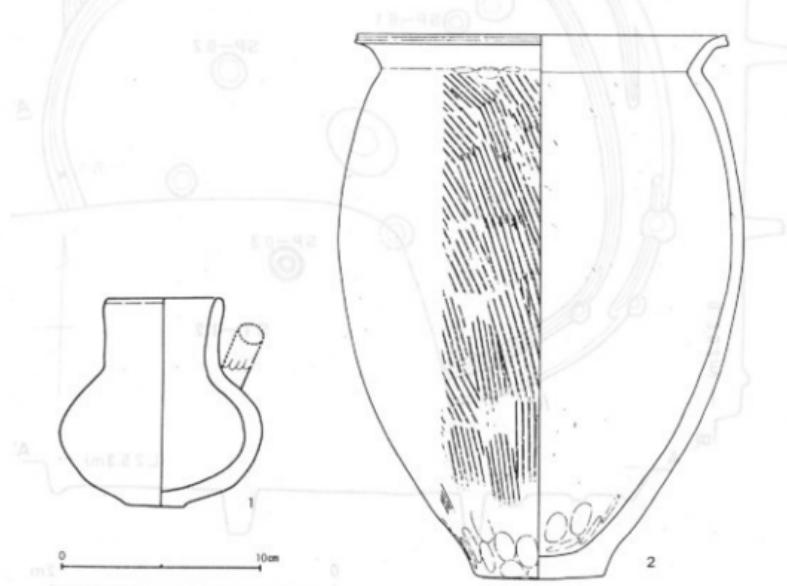
第55図 ST-13平・断面図

ST-13

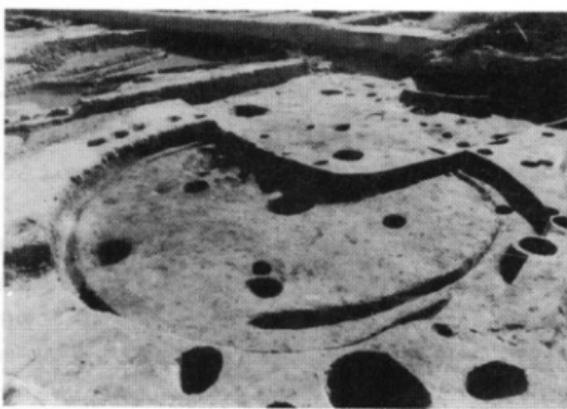
ST-13は南北に3.96m・東西に4.46mのほぼ円形を呈する竪穴住居である。検出された遺構面から床面までの深さは19cm・床面の平均レベルは25.1m・床面の面積は約14m²である。遺構は南東部を一部ST-12によって切られてはいるものの遺存状況は良好であり、床面周囲には幅15cm前後・深さ5~8cmのU字形の断面を呈する周溝が不規則にめぐらされている。

埋土は暗茶褐色土で、東端部の周溝中から碧玉製管玉が一点・床面から10cm程上の埋土中から水差し形土器一点・甕一点が出土しただけで、他に土器片等の遺物はほとんど含まれておらず層序も認められなかった。また、床面で検出されたピットのうち、この住居の柱穴と考えられるものはSP-01~05の5個であり、方形に配置されているSP-01~04の4個の柱穴の中央には、柱穴と同じ埋土を持つ40×52cm・深さ19cmの土坑が認められた。

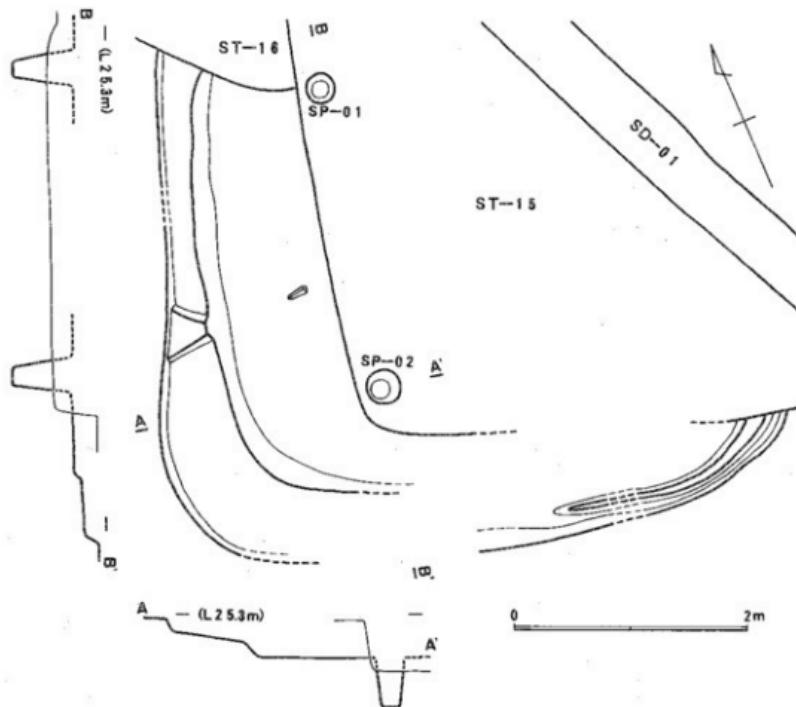
ST-13の遺構の規模や遺存状況についてはST-03と極めて似ており、床面に方形に配置されたSP-01~04の方位がほぼN-20°-Eというのも、ST-03のSP-01~04の方位N-20°-Eと一致することが判明した。そして出土した遺物を検討した結果、ST-13はST-03と同様に弥生時代後期中葉頃に機能し廃絶したと考えられる。



第56図 ST-13出土遺物実測図 (1・2 墓土下層からほぼ完形で出土)



第57図
ST-13 (北西から)



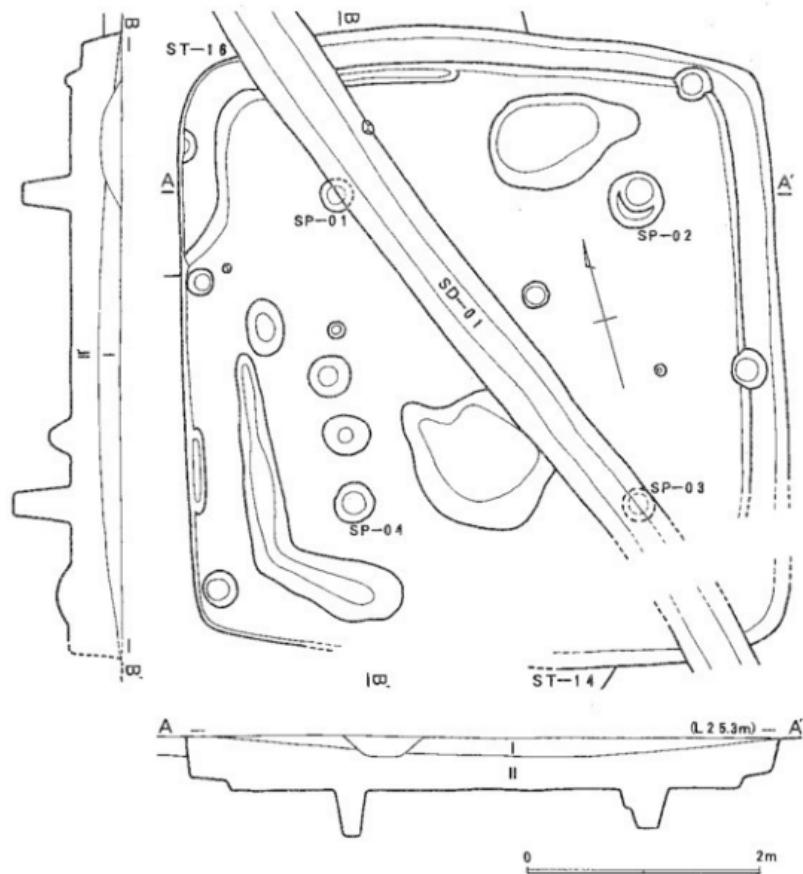
第58図 ST-14平・断面図

ST-14

ST-14は一辺が約5mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方位はN-約 10° -Eを向いており、検出された範囲内での深さは32cm。床面のレベルは24.94m。床面の面積は約23.4m²と推定されるが、ST-14は北端をST-16に、またST-15によってそのほとんどを切られているために詳しい資料は得られなかった。

西壁と南壁添いには、床面との比高差が10~15cm・幅20~60cmのベッド状遺構らしい張り出し部が認められ、ST-15の床面西端ではST-14の柱穴と推定されるSP-01、02の2個の柱穴の残存部が検出された。

この住居の埋土は黒褐色砂質土で、層序は認められなかった。遺物は弥生土器の小片がわずかに含まれていただけであり、これらから遺構の時期を推測することはできないが、住居の形態や方位などから考えて、弥生時代後期末頃の所産であると考えられる。



第59図 ST-15平・断面図

ST-15

ST-15は長軸が5.5m・短軸が5.2mの隅丸方形の竪穴住居で、長軸方位はN-12°-Eを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは44cm・床面の平均レベルは24.78m・床面の面積は26.5m²である。遺構の南端は現代の溝によって攢乱されていたが遺存状況は極めて良好であり、床面の北端と東端には床面との比高差10~14cm・幅25cm前後の段状に張り出した部分が認められた。また床面で検出されたピットのうち、この住居の柱穴と考えられるものは大きさ・深さなどからみてSP-01~04の4個であり、いずれも床面隅に方形に配置されている。

ST-15は遺構の深さが44cmとかなり残りが良く、埋土はI・IIの2層に分層できた。I層（上層）は土器片を多く含む黒褐色土で、II層（下層）直上からは甕や壺の口縁部・土製丸玉の他、多量の弥生土器片が出土した。黒灰褐色土のII層には遺物はほとんど含まれておらず、床面上から鉢の一部が出土しただけであった。

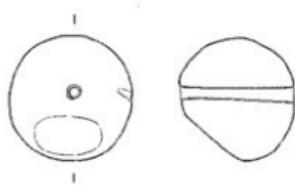
I層の遺物は、そのほとんどがII層直上に置かれたような状態で出土している。まず甕はST-12で出土したものと比較して、器壁は3mm前後と薄く、胴部はかなり丸味を帯びて来ている。体部内面はへら削り、体部外面にはそれぞれの幅が1~2mm程の凹部と凸部が交互に平行して走る細いたたき目が横・斜め向きにあり、胴部下半分にはたたき目の上に縦向きのはけによる調整がみられる。口縁部は「く」の字形に外折し、口縁端部は小さく上につまみ上げ横なでをしている。底部は欠損のため不明であるが、他の特徴からみて庄内II式に併行する時期の土器であると考えられる。壺についてはいずれも口縁部のみであり、ST-15が廃絶し土砂が遺構を埋めた時、その中央部にできたくぼみに逆にふせて並べて置かれたような状態で出土している。そのうち朝顔形口縁の壺と二重口縁の壺は胎土や調整・出土状況などが極めて似ており、対をなしていると考えられ、廃棄された土器群というよりは、何等かの目的があって配置されたものようである。また土製丸玉については、その特徴があらゆる点でST-09出土のものと酷似している。

II層からは獸骨片1点・炭化種子1点・炭化木片1点の他、床面よりやや上で銅鏡1点・鉢1点が出土しただけで、遺構の構成時期を考えることは難しいが、その形態やI層の遺物からST-15は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと推測される。I層上の遺物については住居の廃絶後、遺構内に堆積した土砂上に生じたくぼみの上で行われた何等かの祭祀の痕跡ではないかと考えられる。

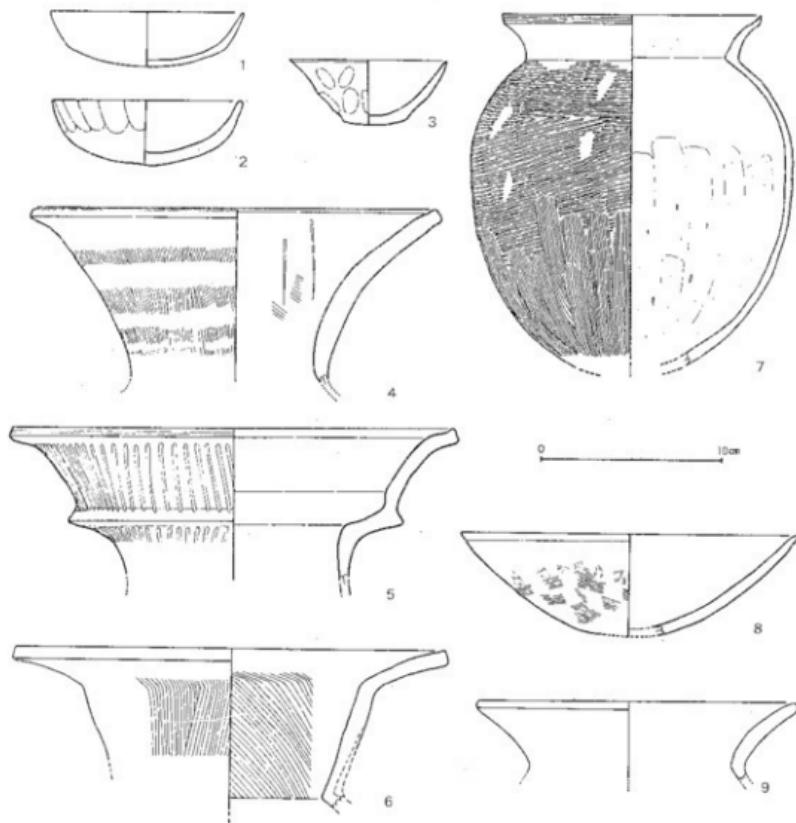


第60図

ST-14・15・16（北から）



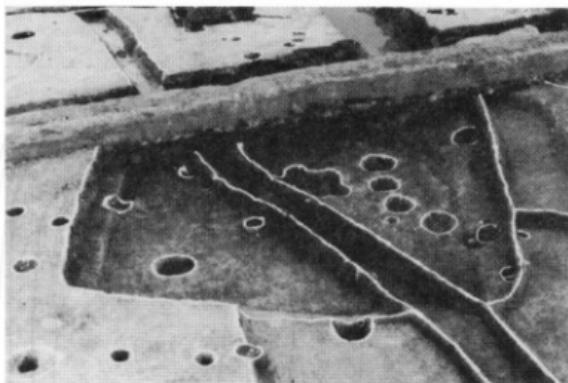
土製丸玉（原寸）
(床面直上から出土)



第61図 S T-15出土遺物実測図 (1~9 II層直上から出土)

第62図

S T - 15 (北から)



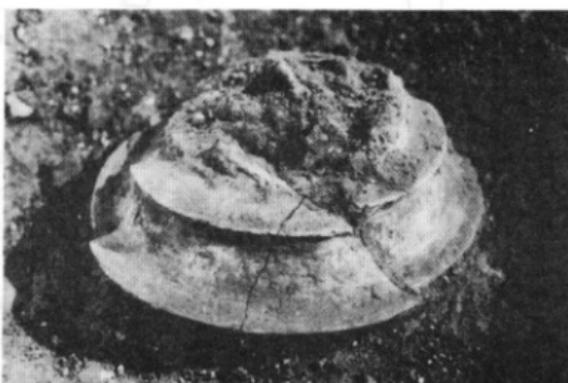
第63図

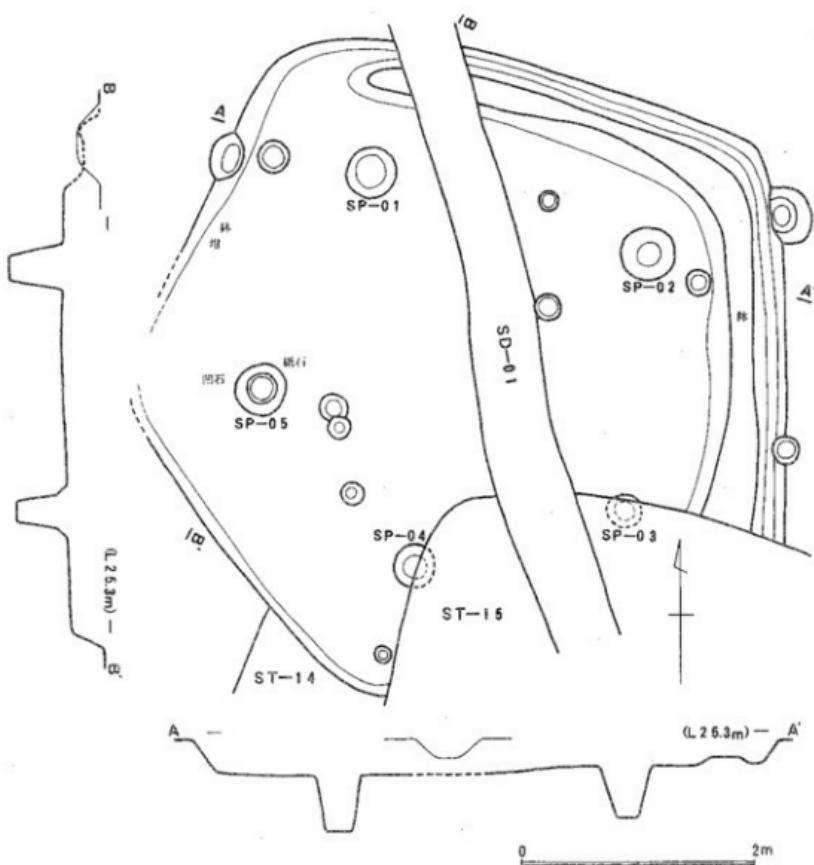
遺物の出土状況
(II層直上)



第64図

遺物の出土状況
(II層直上)





第65図 ST-16平・断面図

ST-16

ST-16は長軸が5.8m・一边が3.5~4mの五角形の堅穴住居である。造構は均正の取れた五角形を呈しているため、その主たる方位は不明であるが、あえて他の方形住居群の主軸方位に近い軸線を取るとN-15°-Eとなる。検出された造構面から床面までの深さは34cm・床面の平均レベルは24.9m・床面の面積は24.62m²である。

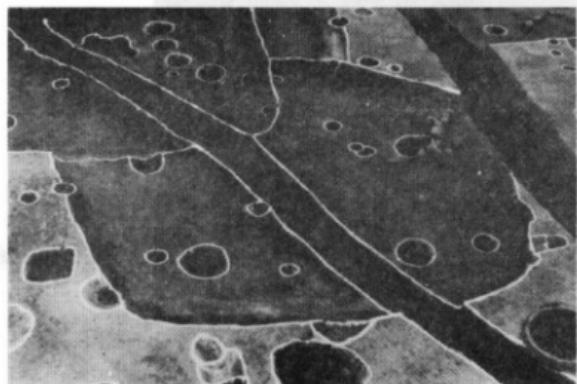
ST-16は南端を一部ST-15に切られてはいるが遺存状況は良好で、床面上では北壁と東壁に添って床面との比高差10~16cm・幅15~40cmのベッド造構とU字形の断面を呈する溝が検出された。また床面で検出されたピットのうち、大きさや深さからこの住居の柱穴と

考えられるものはS P-01～05の5個であり、いずれも住居の隅に五角形に配置されている。

S T-16の埋土は小礫を少量含む、S T-15の埋土（I層）よりわずかに色の薄い黒褐色土で、層序は認められず、炭化種子が一点と少量の土器片が出土しただけであった。しかしながら、床面上には東壁添いのベッド状遺構上に伏せて置かれた状態で小鉢が、北西壁添いの床面直上では小型の鉢と壺型の土器が、やはり伏せた状態で並べて置かれており、その近くでは床面からやや浮いたところで鉢が二点出土している。北西壁添いの床面に並べて置かれていた二点の小型土器は、良質な胎土で器壁は薄く極めて丁寧に作られており、器形は異なるが同じ目的で作成されたものと考えられる。これは日常の生活で使用されるものとしては小さすぎることと、特異な出土状況から祭祀遺物である可能性が高いと思われる。

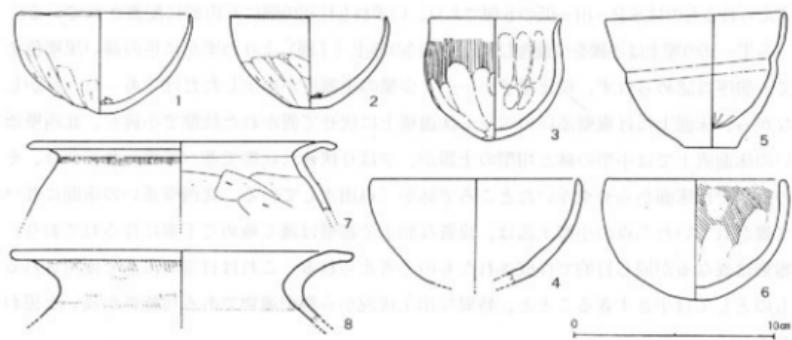
また西端部の床面上には15～30cm程の河原石が十数個、比較的まとまりをもって出土しており、中にはくぼみ石や火に接して赤黒く変色した石の他、一部に鉄錆の付着した灰白色を呈する軟質砂岩製の砥石など、使用痕を著しく残すものが多くみられた。これらの石群についてはその出土の様子などから、住居内で使用されたものではなく、住居の廃絶に伴い住居内に廃棄されたものと考えられる。

この遺構は、その形態や出土遺物などから弥生時代の終末期頃、厳密にはS T-14を切りS T-15に切られているということから、S T-14の廃絶後でS T-15以前に機能し廃絶したと考えられる。



第66図

S T-16（北から）



第67図 ST-16出土遺物実測図

(1~4. 床面直上から出土)

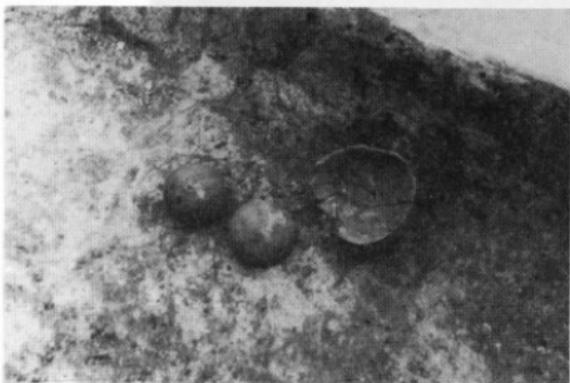
(5~8 埋土下層から出土)



第68図

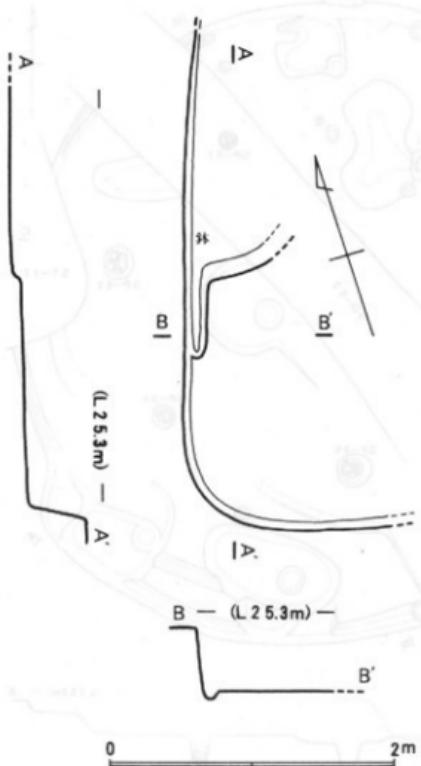
遺物の出土状況
(第67図の1)

(ST-16東壁添い)



第69図

遺物の出土状況
(第67図の2~4)
(ST-16北西壁添い)



第70図 ST-17平・断面図

ST-17

ST-17はE-4グリッドにおいて発掘区東壁添いに一部分だけが検出された遺構で、その遺存状況から隅丸方形の竪穴住居であると考えられるが、検出できた面積が非常に狭かったため柱穴は確認できていない。また、検出された範囲内での遺構の深さは48cmもあったが、埋土は黒褐色土のみで層序は認められなかった。床面の平均レベルは24.7m・遺構の主軸方位はN-約20°-Eを向いている。

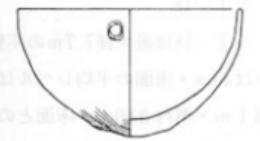
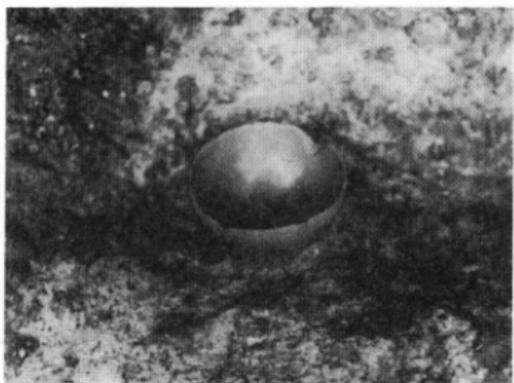
埋土中には土器片などの遺物はほとんど含まれておらず、北側壁添いの床面上から口縁部に竹管文のある小鉢が一点出土しただけである。

ST-17は弥生時代終末期頃の遺構・ST-18を切っていることや、遺構の形態・出土遺物などから検討した結果、弥生時代終末期でST-18の廃絶後に機能し廃絶したものと考えられる。

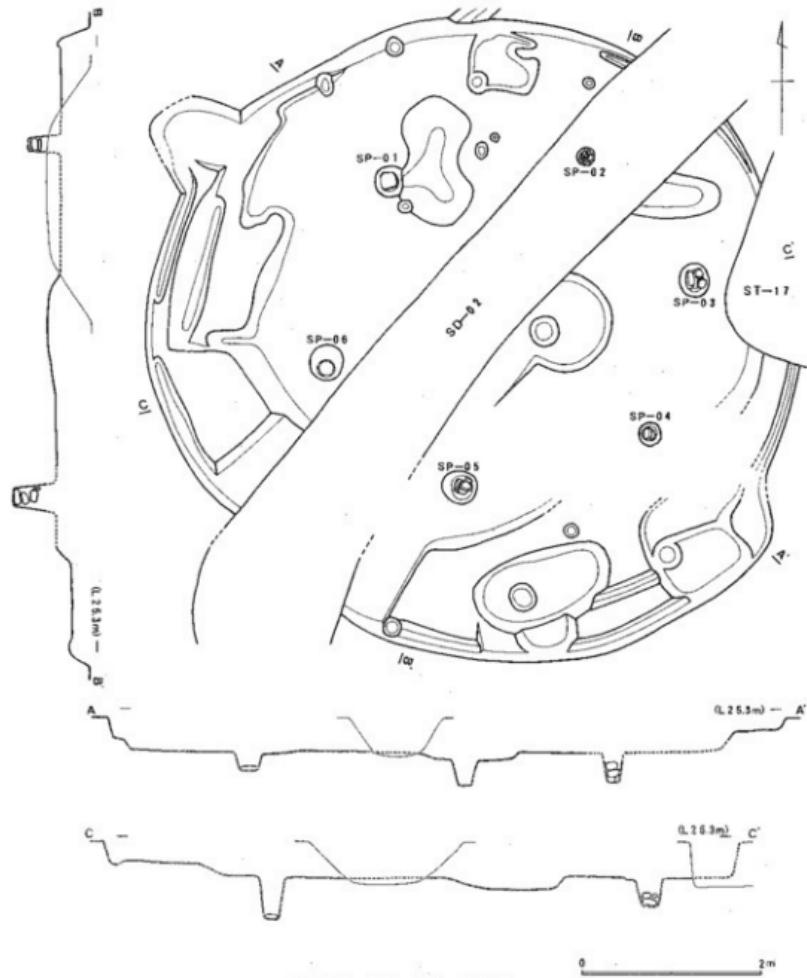
第71図

遺物出土状況

(ST-17西壁添い)



第72図 ST-17出土遺物実測図



第73図 ST-18平・断面図

ST-18

ST-18は最大径7.7mの不整円形の竪穴住居であり、検出された遺構面から床面までの深さは40cm・床面の平均レベルは24.9m・床面の面積は約42.8m²である。住居の北西部には幅1m・奥行き60cm・床面との比高差15cm程の半円形に突き出した部分が認められ、入口を示す遺構である可能性が考えられる。ここから西端部にかけては南側半分の壁面に添って、床面との比高差10~25cmのベッド状遺構が認められる。ベッド状遺構は南東部を中心に三

カ月形にふくらんでおり、北西部と東部では幅が20cm程であるが南東部では1.5mで、数カ所で放射線状に仕切られており段差がつけられている。またベッド状遺構がある部分には壁面との境にU字形の断面を呈する溝がめぐらされている。

ST-18は東端をST-17に、中央部を幅1m程の古墳時代の溝・SD-02によって切られて切られてはいたが、遺構が深かったため遺存状況は良好であった。住居の柱穴と考えられるピットについては遺構の切り合いや土層観察のための畔を取り除いた後、当初不規則な並びを呈すると考えられていたものが、ほぼ正六角形に整然と並んでいることが判明した。柱穴はベッド状遺構を除いた床面を規準に配列してあるらしく、全体的に北に片寄っている。またその中央部には埋土が黒褐色粘性土の、中に深いピットを持つ直径1m・深さ8cm程の浅い円形の落ち込みが認められた。このピットはその底部から完形で小鉢が出土していることから柱穴ではないと考えられるが、その性格は不明である。



第74図

ST-18とST-17・左端
(北西から)

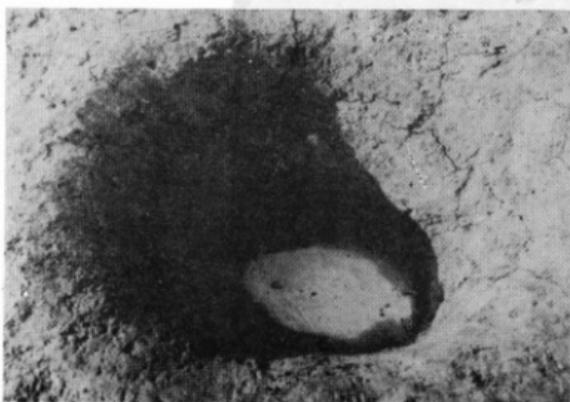
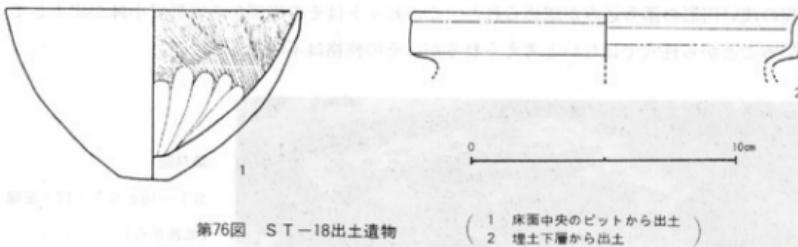


第75図

ST-18・畔除去後
(北西から)

検出された 6 個の柱穴にはその全てに根石が認められ、住居の規模から考えても重量のある大型の柱材が用いられた可能性がある。柱穴によってはその深さが異なり、柱穴内に置かれた石についても 1 ~ 4 個が使用されていることから、複数の石がみられるものについては柱材の長さを調節することが目的ではなかったかと考えられる。

遺構の埋土は小礫を多く含む黒褐色砂質土で層序は認められなかったが、鉄器片 2 点・獸骨片 5 点の外、多量の土器片が出土している。土器片は弥生時代中期後半頃のものが圧倒的に多く弥生時代終末期頃まで確認できた。ST-18 は出土した遺物や住居形態などを検討した結果、弥生時代終末期で、ST-17 より前に機能し廃絶したと考えられる。

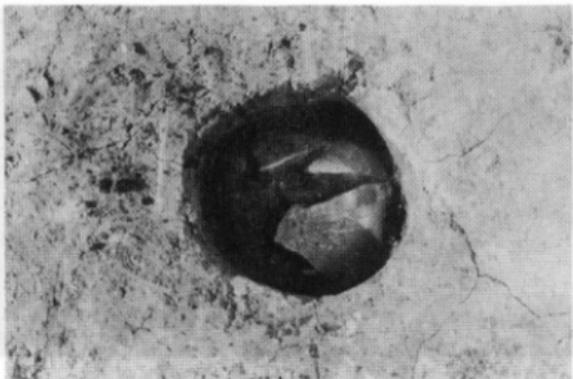


第77図
ST-18・
SP-01検出状況

第78図

S T - 18 ·

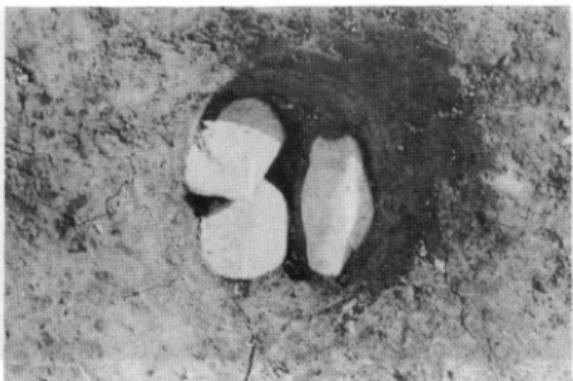
S P - 02検出状況



第79図

S T - 18 ·

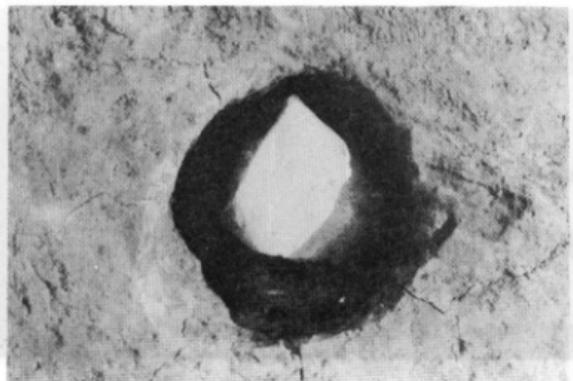
S P - 03検出状況

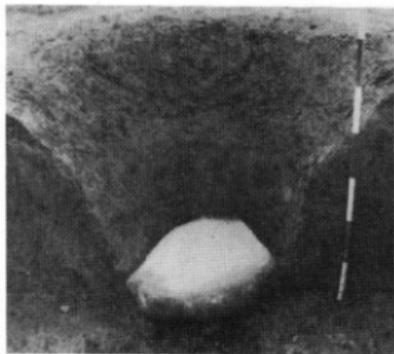


第80図

S T - 18 ·

S P - 04検出状況

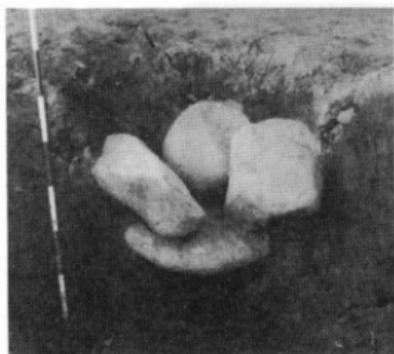




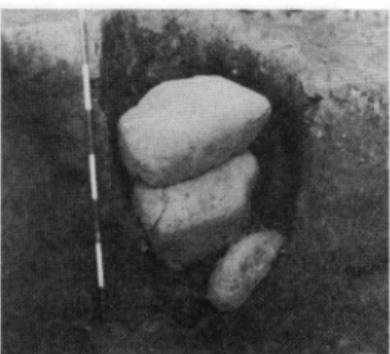
S P - 01



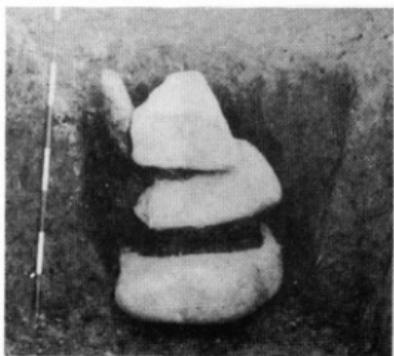
S P - 02



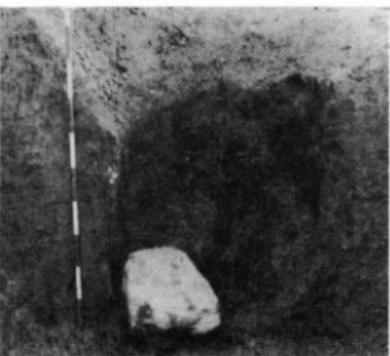
S P - 03



S P - 04

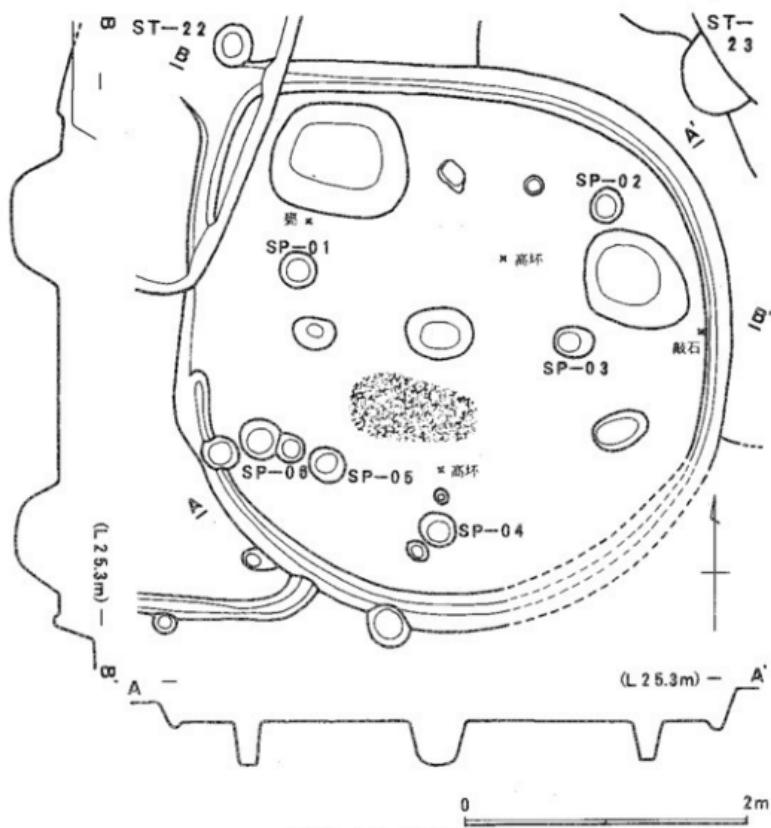


S P - 05



S P - 06

第81図 S T - 18 · S P - 01~06断面



第82図 ST-19平・断面図

ST-19

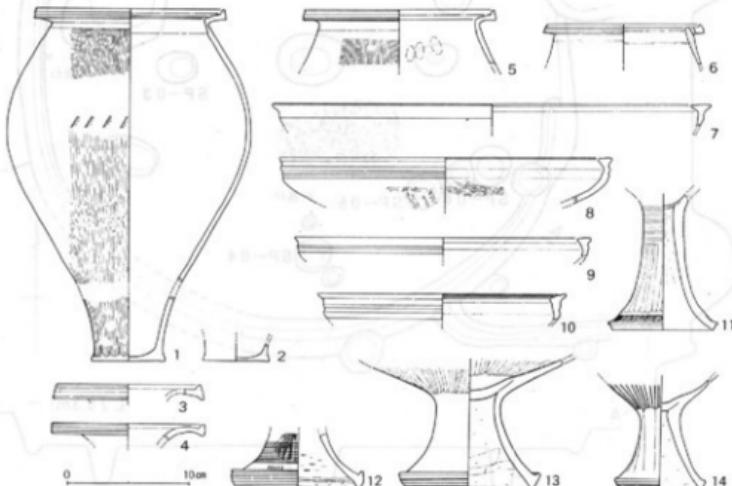
ST-19は直径約4mの円型を呈する竪穴住居で、検出された遺構面から床面までの深さは25cm・床面の平均レベルは25.02m・床面の面積は約13m²である。床面の周囲には幅10~20cm・深さ4~7cmのU字形の断面を呈する周溝がめぐらされている。北西部部分には一部突出した部分があり、ST-19を切っているST-22の床面下で検出できたが、この突出部の床面は周溝の底部から外に向かってゆるやかに上がっており、入口を示す遺構である可能性が考えられる。

ST-19の埋土は土器片を少量含む茶褐色土のみで、層序は認められなかった。床面では多数のピットが検出されたが、その大きさや深さから、この住居の柱穴は不規則に配置されたSP-01~06の6個であると考えられる。また、床面では北西端と北東端で深さ30cm程

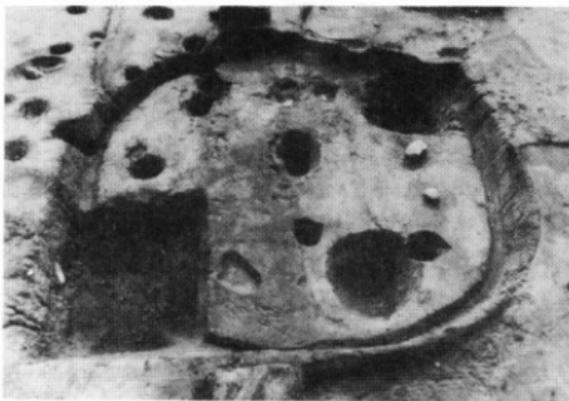
の土坑が検出されたが、埋土はいずれも小礫を多く含む茶褐色砂質土で、遺物は全く含まれておらず、その性格は明らかにできなかった。

床面上からは甕や高環の脚・たたき石に転用された磨製石斧片などが出土しており、床面の南西部分には、3点の石鏃を含むサヌカイト片が多量に散布しているのが確認できた。また、床面中央では40×90cmにわたって焦土となっている部分も認められた。

S T - 19は出土した遺物を中心に検討した結果、弥生時代中期中葉頃に機能し廃絶したと考えられる。



第83図 S T - 19出土遺物実測図 (1・2・5・6・11・13・14 床面直上から出土
3・4・7・8・9・10・12 埋土下層から出土)



第84図 S T - 19 (東から)